291.3-27
1200501364009
291.3
27

農民講道館の眞精神

横尾惣三郎著

始

233

横尾惣三郎著

農民講道館の眞精神

農村教育革新協會版

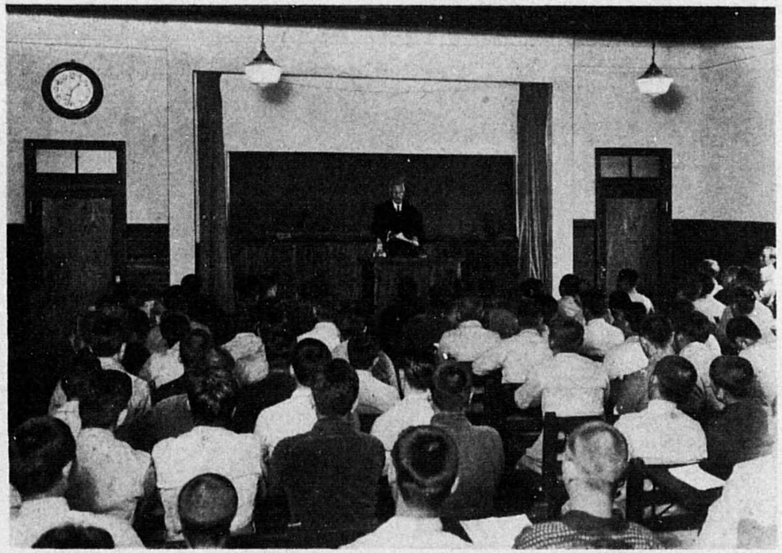
横尾惣三郎著

農民講道館の眞精神

農村教育革新協會版

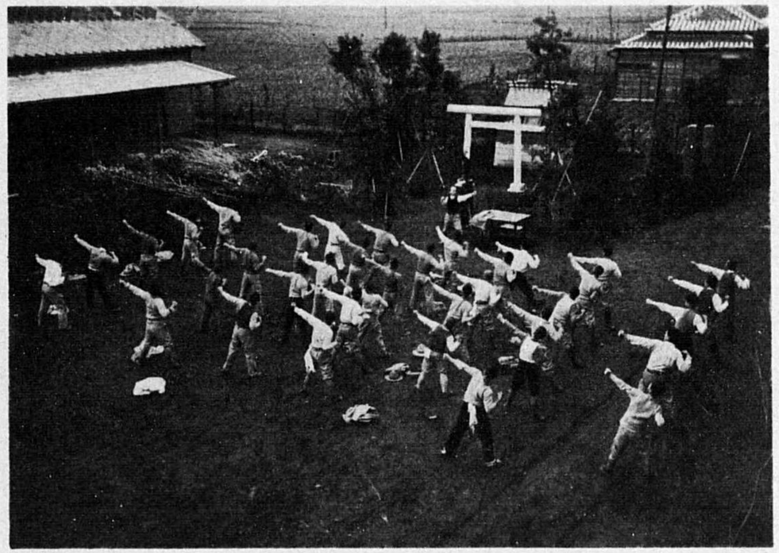
昭和九年 東京

長館尾横と景全館道講民農



講堂（團體の宿舍兼用）

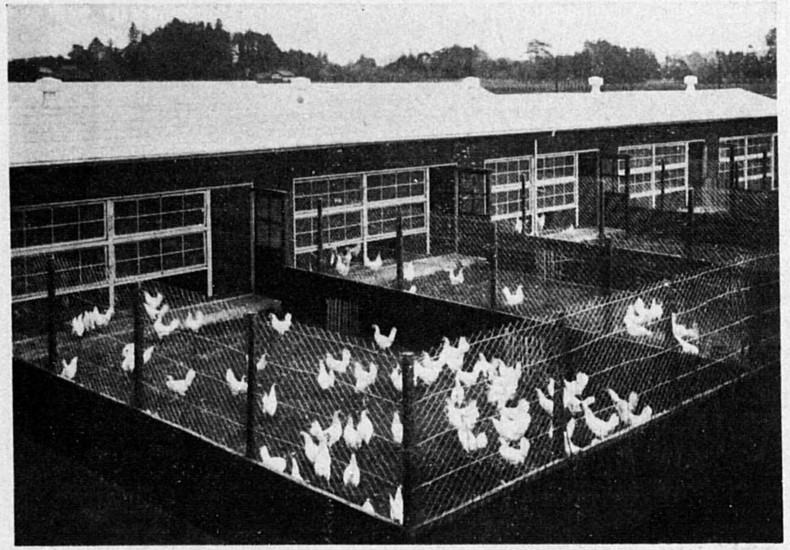
食堂の光景



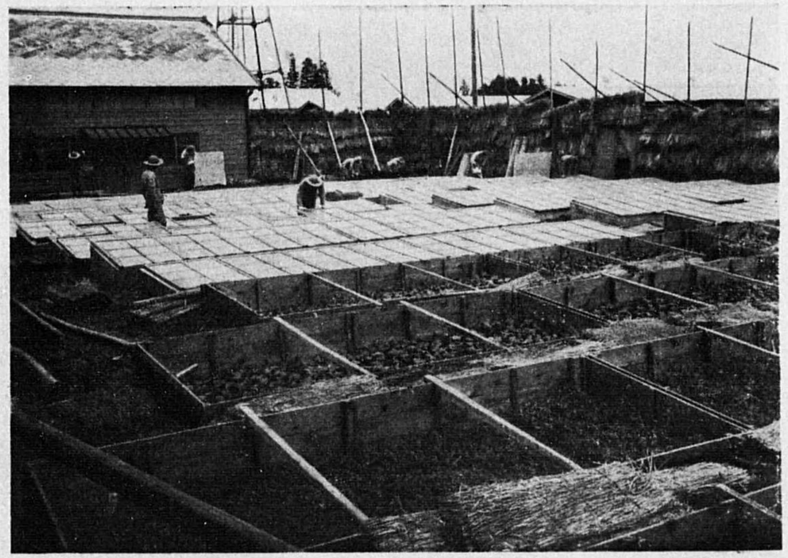
神前曉天の行事

開墾實習の光景

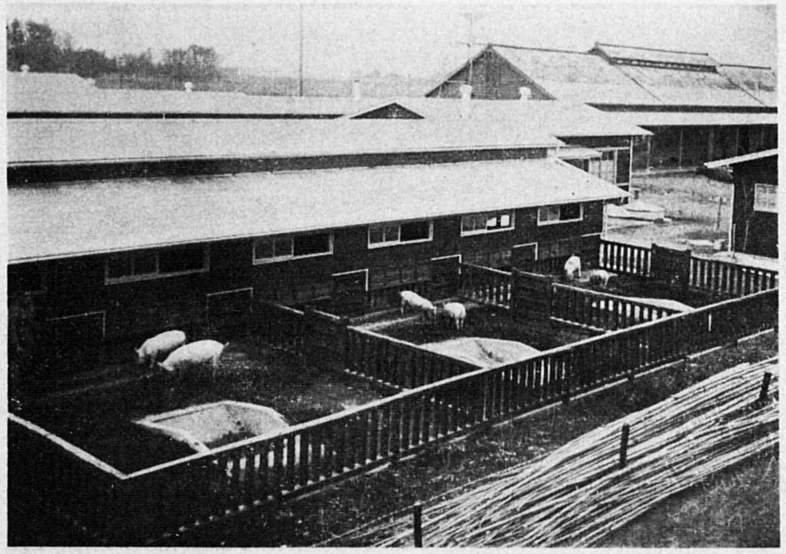
農場實習の光景



鷄舍の光景

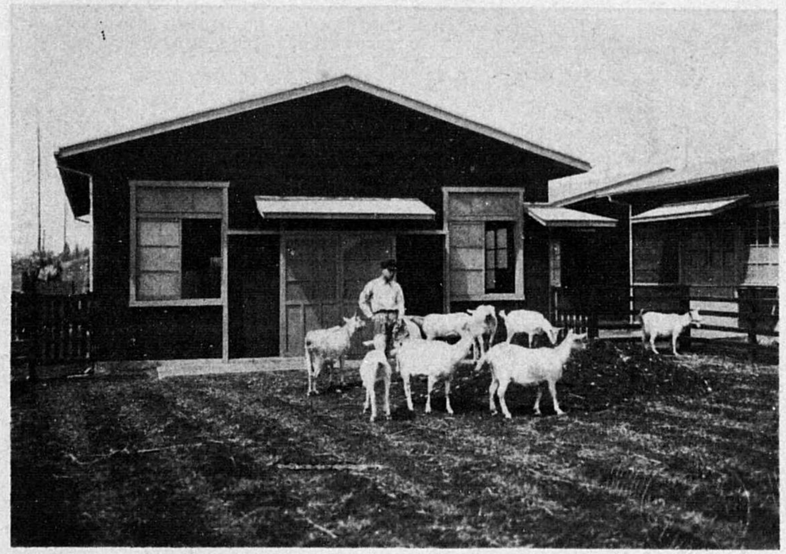


溫床の一部

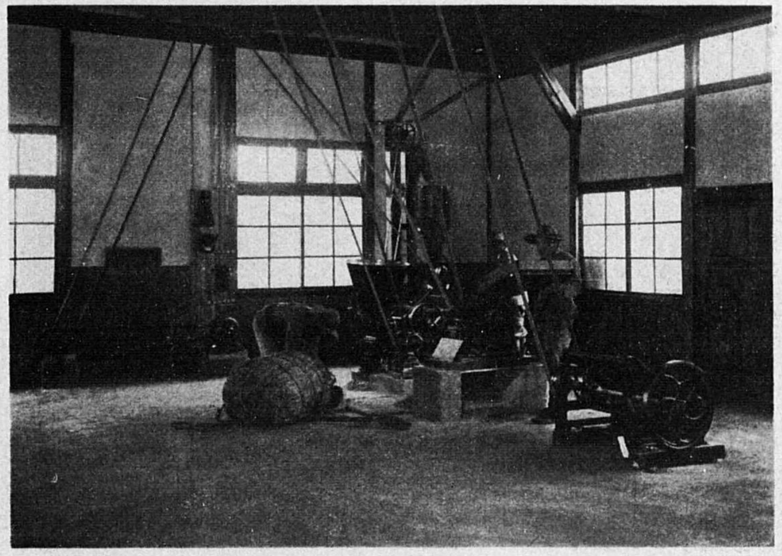


豚舍の一部

露光量違いの為重複撮影



山羊飼育の光景



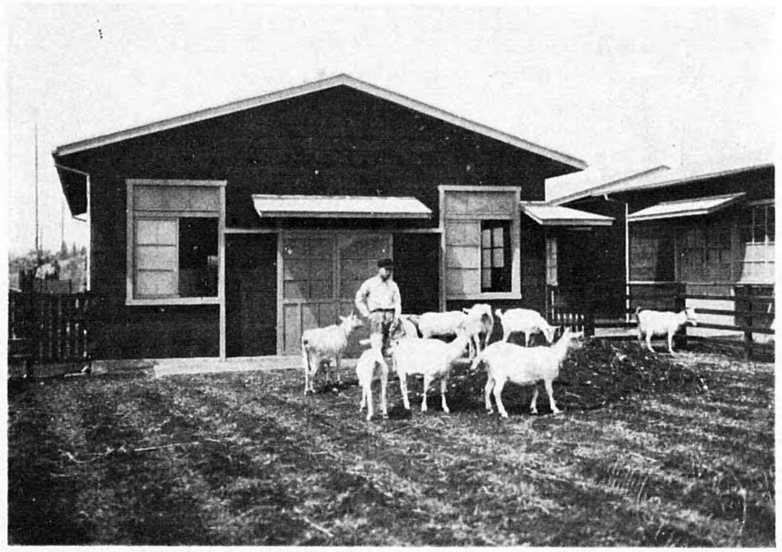
電化農場

291.3-27

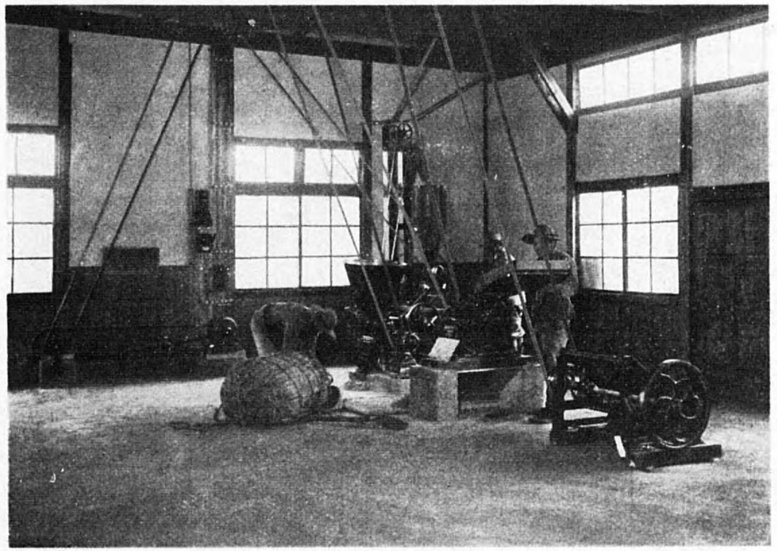
序

農民講道館は今年の四月一日開館したのであるが、開館前から全國各方面より非常に澤山の視察者がある。遠くは滿洲朝鮮より近くは關東地方の近縣から自轉車でバスで、實は應接に遑ないのである。若し此等の視察者に一々希望通りの時間を作つて應接してゐれば、特に自給自足を目標とする本館に於ては且又職員も僅に六名の少數だから本館の教育は根本から蹉跌を來す程である。勿論わざ〳〵視察に來られる人々だから大體に於て眞劍の人が多いのであるけれども、中にはひやかし半分でなくも、遊覽自動車式視察者もないでは

露光量違いの為重複撮影



景光の育飼羊山



場農化電

291.3-27

序

農民講道館は今年の四月一日開館したのであるが、開館前から全國各方面より非常に澤山の視察者がある。遠くは滿洲朝鮮より近くは關東地方の近縣から自轉車でバスで、實は應接に遑ないのである。若し此等の視察者に一々希望通りの時間を作つて應接してゐれば、特に自給自足を目標とする本館に於ては且又職員も僅に六名の少數だから本館の教育は根本から蹉跌を來す程である。勿論わざ〳〵視察に來られる人々だから大體に於て眞劍の人が多いのであるけれども、中にはひやかし半分でなくも、遊覽自動車式視察者もないでは

ない。又眞劍の人としては一面其熱は大に共鳴するが其人一人の爲めに數時間を取られては自分としても非常に當惑する。出來るだけ親切に便宜にしてやりたいと思ふけれども色々の仕事に忙殺されてゐる自分としては事實これは不可能なのである。恐らく視察者が一年に一万を超え二万を超ゆる樣になるに違ひない。此の視察者が澤山來ることは本館の教育普及上又新日本の建設上大に歡迎し自分の心から感謝する所であるけれども、一々此等の人々に滿足を與へようとすることは結局總ての人に滿足を與へられぬ結果となるのである。そこで本館では來館者注意として左の樣に定めた。

一、本館の教育は體驗第一であるから、來館者諸君は半日でも努めて實習されたい。

二、左の時間に限り案内しますから自由參觀はお斷りする。

午前十時より十一時迄

午後三時より四時迄

三、流汗會員及本館の緣故者の紹介ある者に限り食事及宿泊の便を計ります。

四、館長の在館日は當分の内奇數日の午後から偶數日の午前中です。

來館者には誠にお氣の毒の場合もあるが、親切に案内説明する上からも時間を制限することが却つて有効なのである。同時に所謂視

察では本館の教育の眞髓は解からない。少くとも一日位は宿泊して共に働き共に生活しないでは農民講道館の精神の一部でも理解出來ないのである。であるから本館の教育を知らうと思ふ人々は是非共數日位共に働き共に生活する決心で來館されたい。さうすれば自分としてもゆつくりお話し又お話を聽く機會を作りうるのである。世の中は一つしつかりと握れ、一つしつかり握りさへすれば多くのことが自ら解るのである。多くのことを握らうとして一つも握れないのが今の世の人々の常態なのである。終日花を求めて花を得ずとは此の謂である。ぐる〳〵視察して一體どうする氣である、ぐる〳〵廻はるのが目的か、眞に物事を體得するのが目的か、如斯循環小數

式人物が世の中には極めて多いのである。

此等來館者の便利も圖り本館教育の眞髓を知らうとする人々の爲めにと思つて書いたのが要するに本書なのである。本館の視察者は少くとも本館の説明を聽く前に本書を一讀されたい。さうすれば茲に始めて周到なる豫備知識を以て視察出來るのである。又視察し終はつたら靜に本書を熟讀玩味されたい。必らずや本館の教育の何物たるかを體得しうるに違ひない。

最後に一言するが農民講道館の教育は農村の中堅青年の教育ばかりでなく、日本の政治家、教育家、實業家、軍人、宗教家等茲に集ひ來るあらゆる人々を教育啓發せんがために帝都に近い武藏野の一

角與野町をトして農民道場を設けたのである。即此の農民講道館を要塞とし大本山として農村を根幹基調とせる新日本の建設を大本願として居るのである。

昭和九年四月二十日

農民講道館に於て

横尾惣三郎

目次

一、農民講道館の由來……一
教育が農村更生の根本策であり捷徑である……一
中心人物が何より肝腎……三
農民講道館創立の決意……八
二、農民講道館の目標……九
實行力の缺如……九
實行力缺如の眞因……一〇
1精神力の缺如……一〇
2經濟の根底なし……一八
三、農民講道館の內容……二三
自主獨往は世界思想の潮流……二四
1教　師……二六

2 生　徒……三〇
3 實　習　場……三五
4 生徒の教育……三六
5 販賣購買……四二
6 流汗講習……五二
7 流　汗　會……五五
8 農村教育革新協會……五六
9 農民講道館の建築……六一
10 暑中休暇全廢……六九
11 實習以外の授業……七五
12 農民講道館の娯樂……七七
農民講道館歌……八五
農民講道館館則……八七
農民講道館寄附行爲……九五

農民講道館の眞精神

横尾惣三郎著

一、農民講道館の由來

農民講道館を何故に創立したか、農民講道館の建設は蓋し過去二十年來の筆者の體驗の産物であり結晶である。筆者は大正五年十一月長野縣上伊那郡長に赴任して以來地方官として終始農村に密接の關係を有して居つたから、微力ながら地方農村の振興更生の爲めに種々劃策して見た。殊に愛知縣に於て、樺太に於て香川埼玉兩縣に於て心身を傾倒してやつて見た。勿論努力すれば努力するだけの効果はあつたが、所謂農村振興の色々の施設は

要するに速成的表面的其場限りのものが多くて農村農家を根柢から更生させる確固不動の大策はない。精々氣のきいたなか〳〵有益な程度のことが頂上である。稍もするとペンキ塗りの一時を糊塗する宣傳主義のことが少くない。云はゞ賣藥療法の如きもので用意周到に病因を檢討し、其病因に應ずる適切なる對症療法と稱すべき施設が殆んどない。從つて一時的で、政府や主腦者が變はれば折角やりかけた施設を一朝に排棄して顧ぬことがなかなか多い。石垣を積んでは崩し、崩しては積むと云ふ具合で雁去り、燕來る底の役人社會は殊に此の弊が多い。

教育が農村更生の根本策であり捷徑である。

斯くて官界十三年民間七年の體驗から、農村を更生させる否國家を立直ほす根本策は一見迂遠の樣であるが、どうしても教育に依らねばならぬ。而して教育に依つて人間を作ることが一番的確で且つ早道であると云ふ結論に到達したのである。自分の此の結論は理論と云ふよりも體驗實感から滲み出たもので、所謂當今の教育者の常套文句である教育は國家百年の大計なりてふ樣な空疎な抽象的の修辭形容では斷じてない。長い長い間の仕事の經驗や施設の成績結果等から色々に考へぬいた結論がやはり世の中で一番肝要なのは教育で、又一番効果があり捷徑なのが人間を作る教育なのである。教育に依つて國家を立直し又は農村を更生するなど云へば又道學者の定り文句かなどと冷笑する人々も澤山あるだらふが、卽教育など云ふて居つては十年二十年到底焦眉の急に間に合はない。閑人の寢言である。學校先生の樣な浮世放れをしてゐる人々にはそれでよいかも知れないが、轍鮒の急に喘いで居る今日の農民に執つては、教育などまどろしいことでは到底間に合はない。應急策が必要だ、必要だと血眼に騷いで居るのである。

中心人物が何より肝腎

成程人間を作る教育と云へば大變氣永い樣であるが、然し靜かに現實の社會を見ると、

農村であれ、會社であれ、學校であれ、官公署であれ、そこの仕事が立派に出來て成績を擧げて居る所は悉く其中心人物がしつかりした立派な人物だからで、其中心人物さへ適任者を得らるれば自然に着々成果を擧げて行けるのである。卽人間其人を得ることが何より根本で大切なのである。此れが教育の事業に必要なる理由の第一。第二に世の中の仕事は目標刺激乃至空氣と云ふことが極めて大切で、此の目標なり刺激なり、空氣なりを作るには、自ら方法がある、唯一生懸命にやれ〳〵だけでは物事は進まない。此の點から云ふと的確な特種の使命を持つ教育機關は云はゞ社會の燈明臺の樣なもので、目標となり刺激となるには最も適切なのである。而してそこに教育され、又教育されて出る人々は現實に少くとも、其教育機關が明確なる目標と特殊なる存在を持つて居るならば、其波動の及ぼす影響は極めて大なるもので、例令其學校に學ばなくとも天下所在に其學校の聲を聽いて無數の大衆が冥々の間に憧憬し、感應し、共鳴してくるのである、恰も高い山に大きな旗を一本

建てた樣なもので遠近四隣の大衆の目標となり刺激となる。教育にあらざる其他の施設と云ふものは其事業夫れ自身には有効であるけれども麓に小さい旗を幾つも建てる樣なもので、其事業に關係のない一般大衆の目標となり、刺激となりにくいのである。例へば維新前に於て所謂革新の搖籃期に於て、松下村塾や廣瀨淡窓塾が天下に與へた偉大なる刺激の樣なもので、微々たる一村塾にすぎないものが、維新回天の大偉業の素地を作りうるのである。此場合松下村塾の塾生の數を數へて日本全國の人口に比較したならば恐らく大海の一粟に過ぎないし、千釣の珠を一毛でつるす類であつたに違ひない。けれども風雲去來する時松下村塾は見ると見ざるとを問はず、聽くと聽かざるとを論ぜず、海内六十四州苟も志ある人々の血潮を躍らす天來のインスピレーションである。建物ではない、形式ではない、數ではない、魂である、精神である、意氣である。吉田松陰に依つて或は佐久間象山に依つて一村塾が打樹てられたと云ふ聲だけで、一世に與ふる力は既に偉大なるものがあ

る。卒業生は出なくも、教育は始まらなくも、其第一聲に依つて既に天下の人心を動かすことが出來るのである。更に教育が始まつて遠近笈を負ふて來り學ぶ樣になれば其影響は加速度的である。二十名、三十名卒業生の數は極めて僅少であつても此等の卒業生が夫れ夫れ鄕黨に歸るならば其周圍に與ふる刺激は愈〻大なるものがあるに違ひない。由來驚天動地とも云ふべき社會の革新や、國家の革命や凡て斯くの如くして出來るのである。斯くして釀生されたる空氣に乘じて天下の大事が極めて僅少の人々に依つて成就されるのである。十萬二十萬と云ふ大衆に依つて革新や革命が成就される樣に記述もされ、一般に考へられもしてゐるが、此等は總て後世の結果から見た描寫で、革新とか革命とか社會國家の大事は決して大衆の理解や參加などで始まるものでもなければ又出來るものでもない。極く小數の人々の決死的劃策の下に出來るもので、社會の一般大衆は其空氣に動かされて無意識又は半意識の下に躍らせらるゝ半眼半盲の運動にすぎないのである。卽社會の革新とか國家の革命とか、乃至は一團體一組織の更生にしても此の目標此の刺激就中此の空氣が最も必要根本的のもので、此の意味から云ふと、教育の力は實に最も怖るべく偉大なものである。社會の革新國家の革命に思想の力が偉大であり基本的であると云ふのは同樣の意味で、此の思想の有力なる發源地が實に特殊の使命を持つて生れたる此の教育機關なのである。或は又此の思想を根源として此の教育機關が生れ、此の教育機關を要塞として此の思想が天下に擴大せられると云ふてもよろしいのである。

一聲高く叫んで天下に唱へるものは實に此の教育殿堂である。而して此の教育殿堂を持たざる人間の努力は恰も最後の退却陣地なき軍隊の樣なもので、結局線香花火に陷り易いか、少くも其効果が頗る消耗的なのである。要するに此の間の消息は說明ではない。體驗であり、眞に數々の生きた仕事を實行した人々にのみ諒解しうる這個の消息であると云はねばならぬ。

農民講道館創立の決意

此の意味に於て二十年の體驗は自分に自給自足の農學校である農民講道館の創設に念願せしめた。卽筆者半生の體驗であり、結論である。而して更に精確に云ふならば自分の此の決意と確信は大正十一年來愛知縣の農務課長の後半期時代に岡崎市の種畜場を設立し、種畜場としては冒險と云はれた十町歩の農業經營を始めた時からであり、從つてヨーロッパ、アメリカの農村行脚は愈〻其信念を確め、歸朝以來著書に新聞雜誌に「新しい農學校」又は「自給自足の農學校」として明確なる意見を發表し、次いで昭年四年四月時を得て香川縣琴平の郊外に香川縣農事講習所を設立したのが抑〻筆者の理想たる自給自足の農學校の具體案を實行した確實なる一歩であつた。愛知縣種畜場創設以來拾ケ年、香川縣農事講習所設立以來五ケ年、愈〻經國濟民の大旆を揭げて、微力ながら不動の確信と火の如き意氣と鐵石の信念とを以て玆に帝都の郊外武藏野の一角を卜して筆者の血であり、魂である

農民講道館を建立したのである。

二、農民講道館の目標

實行力の缺如

非常時と云ひ、重大危機と云ひ、甚しきは國難來ると叫んで世を擧げて眞に物情騷然たるものがあるが、靜かに現代の世相を考へて見ると、要するに口舌形容の徒が多くて、窮行實踐の士が少く、一言にして云へば政治家たると實業家たると敎育家たると、農民たるとを問はず、口先ばかりの人間が充滿して社會に最も大切な實行力の極めて乏しい、薄志弱行の徒が横溢して居るのである。卽現代社會の最大の缺陷は實に此の實行力の缺乏であり、口舌形容の徒の横行である。所謂非常時の簡單明白なる定義は國家も國民も擧げて口舌形容抽象形式の横行痲痺症に罹つて、實行力の最大限度に消耗したる狀態を指稱すと云ふべ

きで、斷じて所謂非常時を賣物にし喰物にするブローカー政治、他力政治の謂ではないのである。

實行力缺如の眞因

而して國家や國民に如斯何故に實行力が消耗してきたかと云ふに、他に勿論色々の原因もあるけれども、其原因は主として現代教育の墮落破産にありと云はねばならぬ。

1 精神力の缺如

卽國家國民の實行力の消耗した第一の原因は國民の精神力の消耗にありと云はねばならぬ。現代の國民の精神力は特に壯年青年少年に於て極めて薄弱低調なのである。外容形式は兎もあれ、其精神力は極めて微弱なのである。人生の行路に於て最も大切なのは、其決定的運命を握るものは實に此の精神力の如何にある。卽旺盛なる精神力を堅持する人間は人生の行路に於て例令一敗再敗しても其失敗する毎に加速度的の勇猛心を起して、其

失敗挫折が却つて得難き人生の教訓を與へ、失敗挫折に遇ふ毎に意氣愈々砥礪するのである。人生の行路は例へば山登りの如きものである。平坦なる舗道を歩む時には薄志弱行の徒ほど氣嬌り輕風に口笛を鳴らして進むのであるが、一度峻坂に遇ふと直ちに意氣沮喪してぺしゃんこになる連中が多いのである。此の人生の峻坂荊曲に遇ふ時に最も必要なのは旺盛なる精神力である。此の旺盛なる精神力があるならば此の峻坂荊曲に出會つた時に勇氣百倍して此の難關を踏破するのである。此の旺盛なる精神力が無いから忽ちぺしゃんことなつて先きの口笛は忽ち悲鳴と急變するのである。

由來人生の行路は難關に遇つて始めて其の第一歩を見るのである。峻坂荊曲にぶつかつた時に「これからだ」「これからだ」「これからだ」の心中の叫びが眞に人生の叫びである。「これからだ」「これからだ」の突貫に依つて人生の行路は開かれるのである。難關にぶつかつた時が人生の第一歩で、難關にぶつかつてこそ茲に始めて研究もあり、工夫もあり、發明もあり、

發見もあり、修養もあり、人間本來の眞面目勇猛心が湧き出るのである。「こりや六ツケ敷いぞ」の聲が人生の黎明であり、眞劍のひらめきである。從つて難關荊曲にぶつかつたら此れがほんとうの人生の一歩であると思へば茲に始めて眞の人生の一歩が體驗出來たのである。辛うじて人生殿堂の第一關にぶつかつたと思ふと直に悲鳴を擧げてぺしやんことなる現代國民の薄志弱行、其精神力の如何に微弱低級なるか驚くの外はない。斯くして人生の第一峻坂を通過してもう大丈夫と思ふ其瞬間に、又第一の峻坂より更に嶮しい大きな峻坂が眼前に横たはるのである。此の第二の峻坂でさしも精神力の强剛を誇つた人々の、五十パーセントは早くも人生行路難を喞つて悲鳴を擧げるのである。此の場合精神力の鍛錬し修錬しされた意氣旺盛の人々は「これからだ」「これからだ」の掛聲勇ましく突破するのである。斯くて第三、第四、第五の前にも優つて遙に嶮しい峻坂にぶつかつて次第に人生の熔鑛爐に入れられて銑鐵となり鋼鐵となり、百錬不撓の名刀となるのである。即此の人生の峻坂荊曲に遇つて却つて意氣益々砥勵され、所謂笑ふて峻坂に對する人生の修錬が此の内に鍛冶されるのである。人生とは絶えざる峻坂荊曲を踏破することが眞の人生であることを身自ら體得するのである。人生の行路は要するに三十六峯八千溪である。仰げば此の峻峯愈々高く、健兒の意氣愈々揚がるのが眞の人生である。來れ峻嶮！　來れ難關！　鍛へに鍛へし此の人生五十、七十年の限りある吾等の不滅の精神力を試し見んとは、眞骨頭ある丈夫兒の心腸よりほとばしる叫喚であらねばならぬ。

教育の本領

而して此の旺盛なる精神力を鍛錬し修錬することが、人間教育の最大の主眼であり窮極の目的である。物を教ゆるのは要するに此の精神力を鍛錬修錬する手段にすぎないのである。然るに現代の教育は此の點に於て殆んど落第である。成程不必要と思はるゝ程色々雜

多の物事を教ゆるけれども、その教ゆること自身が目的であつて、精神力の鍛錬修錬を忘れてゐるから、唯物事を教へただけで、人間の鍛錬修錬は殆んどがら空である。人間をコツプか花瓶と心得て、唯水をつき込みさへすればよいと考へてゐるのが現代の教育の通弊で、窮極の目的主眼が人間の鍛錬修錬にあることを知らないのである。

教育の眞目的

教育の本來の目的は人間の鍛錬修錬にある。倦まず撓まず、忍耐克己あらゆる苦難に耐えて人間を錬りあげることが教育の主目的で、物事を覺ゆるにせよ、骨を折つて苦勞して覺えたことは身に滲みて忘れないが、樂をして覺えさせて貰つたことはいち早く忘れるだけである。骨に滲み身にこたへたことでなければ自分のものにならないのである。翻つて現代教育の主潮は如何であるか。出來るだけ骨を折らないですら〳〵と面白く可笑しく生徒兒童に物を覺えさせることが教育の本義で、一言にして云へば出來るだけ樂をして教へることが教授法の極意なのである。所謂軟教育一天張りで興味中心の形式體裁非實際が其本領なのである。現代の教育は例へば遊覽自動車で東京市の名所を見物する樣なもので、遊覽自動車的教育である。遊覽自動車で東京市の名所を見物することは極めて輕便で愉快ではあるが、一日市内を見物させられて偖て宿に歸つてから今日一日の見物の模樣を質ねられると、上野公園も芝公園も日比谷公園も九段と明治神宮も殆んど同樣で、唯々立派であり、大きな建物が記憶に殘るだけで、上野公園たり、日比谷公園たる特質は殆んど無我夢中なのである。自轉車で見物せよ、電車で見物せよ。然らばたとへ其行程は遲くともやがて東京市の眞想は次第に握むことが出來るに違ひない。百ケ所夢中で見物するよりも、二ケ所でも三ケ所でも確に握んで見物しろ、人生は遊覽自動車ぢやない、空中滑走ぢやない、嚴然たる事實であり、荊曲の峻坂である。樂をして興味中心に物を教ゆることが教授法の秘訣であるならば教授法とは最も早く忘れることの謂なりと云はねばならぬ。教育の第一義は

面白可笑しくつぎ込むことでなくして、鍛錬し、修錬し、骨身に滲み込ませ血となり肉とならせることである。

現代社會の根本缺陷

更に現代の世相は如何に。現代社會の缺陷は教育社會と同樣一世を擧げて樂をして金を儲けようとする功利主義懶惰的精神の横溢である。日本の現代社會をして今日の如く低調ならしめ、輕佻浮薄志弱行たらしめた根本主因は亦此の享樂本位の惰落思想の流行と云はねばならぬ。政治界を見よ、實業界を見よ、農村を見よ、都市を見よ、官公吏を見よ、若干の例外は勿論あるけれども、一世の潮流は確に懶惰的功利主義的精神の横溢ではないか。古往今來歴史の示す如く、事實の教ゆる如く、國家興隆民族發展の源泉は斷々乎として勤勞努力粉骨碎身の奮鬪的精神にあるのは今更言を俟たないのである。政治界實業界の惰落の現情は最早説明の要を見ない、此れを當面の農村に見る、今日の農村がしいく疲弊し困憊に陷つた原因は固より一にして足らないが、好むにせよ、好まざるにせよ、今日の窮況に陷つた主因は實に大正七八年以來の好景氣に浮かされて、勤勞努力の農民精神は日に日に消耗し、其生活は急激に向上し、而して其收入は半減した今日に尚ほ往年の狂氣的好景氣の再來を期待して家計の大節約を斷行せず、一日送りの氣安め考に沒頭してゐる。然も金肥萬能の農業を經營して、日露戰爭當時年額三千百六十萬圓の金肥が昭和二年には三億四千萬圓に激增して、借金又借金で金肥亡國農業を營んでゐる。日本は實に丁抹の約五倍の金肥を使用して將に世界一の金肥萬能國であり、建國以來の農民の魂である草刈は殆んど忘れられ、堆肥厩肥の苦勞は出來る丈避けて、五十億の借金に惱みながら、借金を寧ろ吹聽しつつ金肥を相變らず購入して居るのである。金肥農業卽亡國農業の迷夢から醒めないのである。

一世の潮流が如斯であり、一世の缺陷が樂をして金を儲けようとする懶惰的精神の横溢

にありとするならば、此を覺醒すべき教育の方針は如何なるべきかは、問はずして明である。此を更生せしむる道は青年少年を鍛錬し修錬し、而して社會の實生活に即する硬教育であらねばならぬことは既に明々白々である。此の一世の病根を摘抉し、社會の惡潮流を打破するには勤勞努力を中心とする鍛錬し修錬する奮闘的精神の發揮涵養にあるは言を俟たない。此の意味に於て前述せる鍛錬し修錬する硬教育が現今社會國家の現情に於て特に層一層緊切なることが明かにされたのである。

2 經濟の根底なし

實行力を薄弱ならしめた第二の原因は其施設が經濟に確固たる根柢を有しないためである。如何なる事業でもそれがよし精神的のものであらうとも又物質的のものであらうとも、經濟に確固たる根柢のない事業は結局線香花火であつて永續しないか或は其事業等に自然色々の無理が出來て破綻を生じ易いのである。殊に世の中で精神的な立派な仕事は

目的が如何にも立派で何人も首肯し共鳴するものでも、經濟的の基礎が極めて薄弱のものが多いから、折角の事業が大體中途挫折するのである。一般經濟社會にも此の弊害は少くないが、教育的の社會施設には特に此の弊が多い。今日の所謂革新的教育機關と稱する民間の篤志家の施設中には就中此の經濟的の缺陷が多く、臨時費は兎に角經常費迄年々寄附に仰ぐものだから施設の高邁な目的に添はぬ樣なことが次第に生じてくるし、佛の顏も三度の譬で篤志家も又かと云ふ氣持になり、設立者の權威を下げること少くないのである。同時に又此の經濟的の缺陷から入學者に過重の負擔を負はせて、一ケ月二十圓もかゝり中流以上の地主か有閑階級の子弟でなければ入學出來ない程の學資が必要なのである。此等の革新的の教育施設としては出來うるだけ入學者の負擔を輕くし、學資は白米其他の現物主義とし、小作人や中流以下の農家の子弟でも入學出來る樣にすることが、革新的教育機關の何よりの急務である。

日本の現在のあらゆる社會のあらゆる事業施設に此の經濟の確固たる基礎を置かしむることが何よりも急務で、政治家であれ、教育家であれ、社會事業家であれ、官公吏であれ此の點の教育が根本的に必要である。此の觀點から考へて現在の教育は如何であるか。勿論少數の例外はあるとしても、時弊を救ふべき教育の現情は將に百パーセント落第である。恐らく今日の教育者に色々の缺陷もあらうが其中で最も致命的の一は卽此の經濟に關する知識が極めて貧弱なる點である。教育の內容が多くは實際生活とかけ離れて、日常の經濟と全く沒交渉なる點にある。教育者の大多數は此の點から見て全くユートピアの夢の國に生活してゐる。國民教育者たる小學教員でも都市や農村の實生活にはとんと無頓着の人々が多く、農村の場合に就て云へば肝腎の農村教育を使命として居りながら、若い師範出身者や中等學校出身の人々は勿論、相當年配の教員でも全然都會生活のファンで、本人は勿論妻君子女まで都會生活に憧れて月給取り根性となり易く、寧ろ農村生活の善風を破壞する者が少くないのである。農村教育者であり乍ら、農業農村などの研究、土に生き土に親む眞劍の生活に體驗もなければ、愛着もないのである。今日非常に叫ばれてゐる農村更生など馬耳東風で、農業が嫌ひだから俺達は教員になつたのだと云はぬばかりの態度を見せる教育者が多いのである。從つて彼等は農村教育者たることを嫌つて、縣廳所在地や田舍の小都會にでも爭ふて轉任したがるのである。一つ農村教育者の本領を發揮して農村に頑然踏ん張つて、農村と共に生死を一にすると云ふ大決心大抱負は容易に發見し得られないのである。上は大學より下は小學校に至る迄、今日の教育施設の內容が如何に非經濟的であり浪費濫費であり、而して社會の實生活に添はぬものが多いかは誠に驚くべきものがある。例へば農學校の實習にせよ、工業學校の實習にせよ、經濟と云ふ點から見れば全然落第である。

以上述べた第一の精神力の鍛錬と第二の經濟的訓錬を養成することが今日我國の最大の

急務であるが、此れを鍛冶し修錬すべき教育の現情は些少の例外を除いて多くは落第であるから、玆に教育大革新の叫が高く唱へられ、實行されねばならぬのである。昭和教育革新の根本的基調は實に此の二點に存在するのである。

三、農民講道館の內容

農民講道館は現代の國民に最も缺けて居る精神力の鍛錬と經濟的の修錬との二大目的を達成すべく生れたる革新的教育機關である。教育機關と云ふけれども今日の所謂學校と云ふ名稱では其包含にする全精神を體現し得ないから、寧ろ人生の修行を專念する農民道場と命名する。古來我國に傳はつてゐる道場の名がぴつたりとくるのである。今日の學校と云ふ名稱は今日の教育そのものためでもあるが、如何にも淺薄で平面的で、人間をお化粧する程度位には考へられるが、人間を鍛錬し修錬すると云ふ樣な深みのある立體的の趣は見當らないのである。道場の方が學校と云ふより遙に根本的で高遠で、立體的で、深い深い味ひがするのである。

農民講道館の根本目標たる精神力の鍛錬と經濟力の修錬とを達成する爲めに不可缺の要件が實に自給自足の經營である。卽農民講道館の教育に要する一切の經費、職員の俸給、小作料、家畜の飼料、農場の肥料、其他のあらゆる費用を農場の生產物、家畜の生產物等農民講道館の職員生徒の勤勞による一切の收入で此れを支辨するのである。一言にして云へば農民講道館の勤勞收入を限度として支出を制限するのである。筆者が大正十二年以來、筆に口に天下に唱へつつある自給自足の農學校と云ふのは此の謂であり、昭和四年四月香川縣琴平町郊外（仲多度郡榎井村）をトし創立した香川縣農事講習所は此の自給自足の農學校の完全なる最初の試みである。大正十二年愛知縣岡崎市美合町に創立した種畜場內の農村青年教育は完全なる自給自足ではないが、其根本精神を同うする。前者は相原言三

郎氏に依つて既に五箇年の經驗を經、後者は參木晋七郎氏に依つて十年の星霜を經てゐる。社會の革新を念とする古來の人々が不可避的に經驗せる樣に、其間口にし筆に現はし得ざる所謂心骨を削る苦惱は嘗めたが、幸にして今日は天下に斯道場ありと其存在と其意義とを明確に認めしむるに至つたのである。

自主獨往は世界思想の潮流

翻つて思ふに我農民講道館の本領たる自給自足は此れを思想的に見るも、今や世界思潮の根本潮流であり、同時に我が日本に於ても動かすべからざる國民的思想の大潮流である。人類の共存共榮を根本思想とするデモクラシーは固より正しい人間の欲求であるけれども明治末期から、大正年間を通じて高く叫ばれたデモクラシーの思想は堅實なる思想の根柢なく、自主獨立の本領を失つて稍もすれば他力本願の似而非デモクラシーに惰落した傾が少くなかつたが、此の似而非デモクラシーの謬思想を打破して、國家社會及個人生存の根

本原理に出發して、自主獨立を本領とする「我」に醒むる思想が、少くとも今後一世紀間の世界思想の基調たるべきことは筆者の深く信じて疑はざる所である。而して此の自主獨立の根柢は要するに自給自足であり、今日の社會生活に於て絶對の自給自足は存し得ないが、自給自足を原則とする觀念は國家社會生活に於ても、個人生活に於ても飽く迄必要である。從つて農民講道館の高唱する自給自足は單なる物質上の自給自足のみの謂でない。經濟上の自給自足も固より本館の使命であるが、我等の堅持せんとする自給自足は其高遠にして鞏固なる根柢を精神生活に胚胎して居るのである。農民講道館の自給自足を單に物質萬能主義の現れなりと批評する者の如きは蓋し眼光紙背に徹せざる人々で、物心一如たることを知らざる者の迷言である。今日の時弊に慨して生れたる革新的敎育機關すらも前述せる如く、精神鍛錬主義の一本槍で、同樣に根本的であるべき經濟的修錬を忘れてゐる點は我等の甚しく遺憾とする所で、勿論確固たる主義主唱の下に起つて居る人々の施設で

あるから、各其本領に依つて進むべきは勿論であるけれども、農民講道館が國民高等學校其他の革新的教育機關と異る點は實に此の一點にあつて、然も此の一點こそ筆者の最も現在の教育者に對して强調せんとする主眼點で、兩者存在の根本理由を異にする明確なる重點である。

協調會の農村に於ける特種教育施設の編輯者が香川縣農事講習所を以て國民高等學校と同種類中に含めた如きは甚だしい錯覺で、此の一點に見ても折角の調査が單に通俗的平面的の技術に陷つて、施設の根本認識を缺いたものと云はねばならぬ。

農民講道館の教育の內容を述べると

1 教師

教師は窮踐實行家である。理想としては人格技能萬人に秀でたものを得たいのであるが、人に於ても技能に於ても斯くの如き人材を得るのはなか〳〵至難であるから、出來るだけ此の理想に叶つた人物を得ることに專念するが教育者は所謂教學の半であるから、教へると同時に矢張り半ばは育ぶ氣持で人格技能共に修養に努力する。人格技能は此の方針として農民講道館の教師に要求する最大の點は窮踐實行挺身第一線に立つて身を以て生徒を率ゆる人であらねばならぬ。と同時に責任感の最も明確なる人たることを要する。今日の社會は政治家であれ、教育家であれ、實業家であれ、あらゆる社會の人々の根本的通弊は口舌形容の人々であつて口先きだけ達者で實行の極めて乏しい點であり、同時に功利に急にして責任感の驚くべき弱い點である。此の二點は現代社會の根本缺陷であつて、就中今日教育の通弊と斷じて過言でない、戰場で部隊が突貫するのは小隊長中隊長が挺身砲彈を犯して眞先に突貫するから、部下は此の隊長を失はざらんがために銃劍で隊長を包んで突貫するのである。若し今日の社會の指導者の多くの樣に後方約十メートルから逃げ腰で「進め、進め！」と號令するならば何人か突貫しうるだらうか、人生の成敗は實に此の一點にあ

る。織田信長は斯くの如くして桶狹間に今川義元を屠つた。上杉謙信は斯くの如くして武田信玄の心膽を寒からしめた、斯人は達觀し、眞人は此の間の消息を悟得する。先づ苦しいことは教師が先にやる。丁抹では豚小舍の掃除は一家の主人がすると同筆法である。農場なり、畜舍なり退散の時間が來ても仕事が間に合はぬ場合は教師が最後迄働いて居れ、さすれば退散しかけた生徒も踵をめぐらして教師を助けるに違ひない、教師だけ先きに引き揚げて「此れだけすましてから歸れ」と云ふからあらゆる問題が起るのである。

教師は出來る丈小人數を理想とする、今日の學校は殊に農學校は教師が馬鹿に多うすぎる。仕事が少くて教師が多いから、自然怠けるのである。働く人が二人か三人で遊んでゐる人が十人も十五人も居るからグレシヤムの法則通り惡貨は良貨を驅逐するのである。今日の農學校を見ても實習教員は僅か二、三名で教室の先生は馬鹿に多く、机の上の先生で實際とは沒交渉なのである。農學校に机の上だけの先生は全然不要である。實習に必要だ

から其準備として實習の際に出來ないことだけ教室の授業をするのである。何所までも實習が主で教室授業は從であらねばならぬ。然るに今日の農學校は全然此の正反對で教室が主で實習はほんの然もつけたりである。農學校は宜しく實習を本體とし教室授業を從とすべきである。從つて農學校の教師には全部實習を受持たすべきで、地歴の教師には養鯉を、理科の教師には草花を、體操教師には堆肥を、國漢の教師には養雞をと云ふ具合に夫々の教師に實習を生徒同樣にやらせる。普通の頭さへあれば後は努力次第で農業は出來るのだから、全教員に實習を受持たせる。それには校長先生は一番早く出勤して、農場、畜舍、溫室等の見廻りをして夫々注意指導を與へ、經營上の眼から統轄した考へで指導せねばならぬ。

農民講道館の教師は館長たる自分が教育の大方針から、生徒の訓鍊、農業の綜合的經營飼料肥料其他一切の品物の購入、農場、畜舍、溫室等の生産物の販賣、收支の計算、視察

者の應接、外部との交渉に當る。館長の外に副館長があつて不在の場合館長の代理をし、副館長は農場全部の主任である。米麥、養蠶、蔬菜、果樹、溫室等一切作物の生産に當る、此の外に畜産主任があつて養雞養豚、山羊、乳牛、緬羊等の飼育管理に當る。正教員は三名で他に助手が畜産に一名、農場に二名居る、計六名の教師助手で全部館内に住宅がある。出來るだけ教師の數を少くし、教育の上にも作業の上にも統一調和を念とする。理想を云へば人格技能ある一人の教師の下に數名の助手で全部が經營されてゆけば教育が徹底するのである。

2 生徒

生徒の第一要件は愛農心が旺盛であり求むる心の熾烈な者であらねばならぬ。長男であるとか、次男三男で月給取りにさせたいとか、或は頭が惡くて中學校に入學出來ないから、農學校に入れようなど云ふ本人の希望意思を顧みないで、所謂トコロテン式入學は絶對に許可しないのである。農業に對する燃ゆる愛着心があり、自己の經驗知識の不足を痛感して昔のかの笈を負ふて千里の遠くに學ぶの意氣が必要である。叩かれても打たれても眞に師に就て學ばうとする人間は何の苦にする所か、師の鞭、師の言葉を身に滲みて有難いと感ずるのである。昔は師の鞭の力の衰へたのを慨いた篤行好學の人間もあつた位である。近頃の學校の樣に生徒や學生の御氣嫌をとりながら教育するのでは教育にあらずして市井の營業であり取引である。教育者に確信と信念が無いから斯樣な馬鹿氣たあべこべな事件が起るのである。都下の大學騷動の樣に教師と學生と喧嘩し合つて結局學生の歩が通つて解決したなど云ふのでは、全く勞働者のストライキで大學と云ふより何何工場と云ふ方が適切である。確信を持て！　信念を堅持せよ！　教師は生徒學生に教ゆる人であつて、彼等の一擧一笑に動搖する娼婦ではないのである。學校は教師だけでよい、教師さへ確信を以て嚴然と起つて居れば生徒なくしても立派な學校である。止むを得ずんば全生徒が退學し

ても教師は嚴然と所信に忠なるべきである。生徒の資格は年齡滿十七歲以上、尋常小學校を卒業したものならば何人でもよい。學歷の如何を問はない、唯高等農林、大學の卒業生は本科二年に編入するだけである。年限は二箇年で、四月一日に入學し三月二十五日に卒業する。

塾生活

生徒は悉く塾舍に入舍させ、炊夫小使なく、生徒の共同自炊である。此の炊事を自らすることが最も必要で、食料品、薪炭の買入、調理方法等充分に體得させる。經濟とか農業經營とか如何に口先で騷いでも疊の上の水練では何にもならぬ、ザブンと水に飛び込ませるのが何より肝腎である。炊事を自分でやれば日用品の値段、經濟、調理、社會の表裏等が充分に體驗出來て、他日一家を持つて農業を經營する場合にどれ位役立つか知れない、一家の主人が日用品の價格や衣食の經濟に無頓着でどうして一家の經濟がうまくゆけようか。

炊事の費用は現物主義で一ケ月白米三斗を持參させる、白米持參の出來ない者は時價で金を提供する。此の白米三斗で食事の全部を支辨する。大體一日六合月壹斗八升の食米で一斗二升を副食物、調味料、薪炭代にあてる。炊事委員があつて献立表、買入支拂總てをやる。米三斗の範圍內で炊事萬端をやるのだから、飯や副食物のまづい、うまいは自己の責任である。まづければうまくつくる研究をしろ、館長は結論だけ教へて置く。而して此の献立表及炊事一切は縣廳の榮養技手が四月入學當初七日程實地指導する。同時に入學の當時嚴密な身體檢査をして、一ケ年後に此の榮養食の及ぼす影響を調査するために身體檢査をする。味噌、醬油、漬物全部生徒が職員の指導の下に生產する。飯米玄米を購入して本館の農舍で七分搗に精米する。

塾舍生活は一大家族である、一室十四疊に七人を一家族として收容し、年長者を戶主と

し、家族を農場係、畜舎係、溫室係、加工係に配屬させる、實習は農場にせよ、家畜にせよ、加工にせよ、各戸に割り當て、其收支經濟を獨立させて經營の巧拙能率の如何を見る。

産業組合の設立

各戸獨立しても共同作業の有利のものは共同にし、物品の購入販賣は館内に設置された産業組合に依つて一切をやる、産業組合は各戸を組合員とし、農民講道館信用購買販賣組合と芙蓉利用組合との二組合が出來てゐる。前者は各戸の肥料、飼料、日用品の購入及組合員の金融を圖り、後者は與野町及三橋村を區域とする利用組合で、精米、製粉、粉碎及製繩を電力を利用してやる、設備は農民講道館の農舎に備付けてある。從つて飼料や肥料の配合も出來るのであり、斯くして本館の生徒に對しては徹底的に産業組合事務の練習をさせる、所謂摸擬組合等でなく各自の眞劍なる利害の下に産業組合の機能効果を體驗させるのである。

3 實習場

實習場は田畑十二町歩（初年度は約七町五反歩）中水田約二町歩、果樹茶園二町歩で他は全部畑作である、畑作は蔬菜を主とし、冬作は麥作及蔬菜をやる。蔬菜はあらゆる種類で果樹は葡萄、梨子、桃等で溫室は草花洋菜を主とし溫床は蔬菜の育苗を主とする。

家畜は鷄千五百羽、豚百三十頭、山羊二十頭、牛十頭、緬羊五十頭を飼育し、卵肉毛及乳で收入を擧げる外、自給肥料の造成を主眼とする。鷄卵は種卵及食卵で、孵化育成もやる。

此の外敷地及實習畑の周圍には生花の材料等になる切花を植ゑつけ、鷄舍豚舍の周圍に葡萄及飼料作物を栽培し、場内の閑地には柿、櫻、桃及種々の飼料作物を出來得る限り栽培して一町一反歩の敷地中から三、四反歩の收入を擧げるつもりである。

蔬菜及肉の加工も加工室があるから、漬物、味噌、醬油、罐詰、ハム、ソース、ケチヤップ等も生の販賣市價を考慮して出來るだけやる。今後の農村としては加工事業は勞力の

調節、收入の增加及成るべく經常的の收入を多くする上から見ても肝要であるから、此の加工には特に重點を置く。

精米、製粉、製繩等は電力を利用してやる。

4 生徒の教育

生徒の教育は前述せる通り實習を主とし、栽培、肥料、加工等の一切のことは先づ實習に訴へてから、又實習中に教授する。農民講道館には從つて教室と稱すべきものは講堂兼宿泊室が一つあるだけである。

教室教育の打破

所謂教室教育を打破することが教育革新の急務で從來の教育は教室教育に墮してゐる。教室がありすぎるから、農學校も机上の農業をやるのである。教室を作らなければ自然農場で教育するのである。何々農學校にあらずして何々教室學校であり、何々高等農林學校にあらずして何々高等教室學校であり、又何々農科大學にあらずして何々教室大學が多いのである。農村教育革新の第一歩は實に此等の農學校の教室を最少限度に打壞はすことである。從つて農民講道館では農場、農舍、畜舍等で實習中に又實習後に說明教授する、特に教室の授業は最少限度に減少して又教室授業をやる場合でも、從來の樣に一定の教室に整列させて授業するのではない、農舍の片隅に粗末な机をならべてやればよい、必要の場合に應じて臨機にやる。實習に基く教育だから疊の上の水練でなく、活潑潑地の眞劍試合である。斯くして始めて教師の持つ鋤にせよ、鍬にせよ、白墨にせよ、鋤にあらず、鍬にあらず、白墨にあらず、教師の全精神が此の鋤此の鍬此の白墨の中に躍動するのである。

一日の行事

一日中の行事は大體下の如くである。起床四時三十分より五時三十分迄、日出の早遲に依つて調節する。起床後三十分內に居室其他の淸掃、洗面、着服をすませて館庭の大神宮

前に集合、

一、國旗掲揚、君ケ代合唱

二、皇國體操

三、祝詞、誓ひ

四、天皇陛下彌榮

五、館歌合唱

神前の行事を終はつて一時間實習、此の間草刈、乳の配達、色々の作業が行はれる。朝食は六時半より七時半迄、季節に依つて異る。朝食後三十分休息して一時間授業、終つて正午迄實習、正午晝食、午後一時から二時迄授業、終はつて日沒迄實習する、實習中午前午後十五分宛の休息時間がある。夕食六時乃至七時、夜間一時間授業を行ふ。此の授業は本館職員の授業、課科講演、座談會、研究發表會等である。名士や專門家の課科講演は臨

機に行ふが大體一ケ月三回位である。

本館には職員の外多數の囑託がある、囑託は農業の各方面の實際家で埼玉縣下の篤農を主とし、試驗場、縣廳、農會等の技術者で、學歴は問題でなく、人格技能を中心とする。此等の囑託は米麥、蔬菜、果樹、溫室、養鷄、養豚、養牛、山羊、緬羊、農產加工、副業、養蠶等で夫々專門的に埼玉縣下一流の人々を賴んでゐる。此等の囑託は時々必要に應じて來館指導するのである。世の中は又實に面白いもので此等の一技に秀でた人々は熱と意氣と努力に燃えてゐるから、學歴一方の人に比べて幾多の長所を持つてゐるし、指導が眞劍である。

實習は無上の精神教育

本館の教育は實習による鍛錬、修錬を主としてゐる、人生の修養にしても教室の講義で、忠孝、禮儀、忍耐、勇氣、克己、努力、勤勉、儉約、經濟等の行爲を教ゆるのでなくして、

農場畜舎等に於ける實習、塾舎に於ける炊事清掃、生産物の販賣等を實行する場合に於て此等の人間の道德は眞實に體驗し體得されるのである。文字の講釋ではない、口先の說經ではない。窮行實踐である。此等人間の修養が書物や教室に於てよく體得されるか、或は我等の云ふ如き人生の實習道場に於てよく體得されるか、比較說明の要は毛頭無いのである、而して今日教育の弊は修身と云ひ倫理と云ひ、此等教室のお談義が多くして窮行實踐の極めて乏しいことが一世の痛弊であり、大欠陷ではないか、よく在來の教育家の口から農民講道館は實習ばかりで、筋肉勞働だけで、精神教育が少いなどの批評を聽くのは所謂問ふに落ちずして語るに落つの類で、憤飯の至りと云はねばならぬ。教室や書物の上でなければ精神教育が出來ないなどは將に現代教育家氣質の珍風景と云はねばならぬ。斯くの如き形式的疊の水練式の精神教育を打破して言行一致、行即言、言即行の二者一如の教育をすることが實に現代教育の急務中の急務ではないか、即あらゆる人生の道德は此の鍛錬し修錬する實習作業の中に體得せらるゝものであり、從つて此の實習教育こそ最大最高の精神教育と云はねばならぬ。

同時に又農民講道館には知識教育が乏しいと云ふ批評である。此等も亦知識教育は教室や書物の上でなければ得られないとする在來教育の惡弊の表現である。筆者をして端的に云はしむるならば所謂教室にて眞の知識教育はないのである。辛うじて知識教育らしいものは或は存在するかも知れないが、浮すべりの知識であり、素通りの知識であり、眞に知識を體得するには鍛錬し修錬する實習教育でなければ得られないのである。少くとも教室教育では精々知識吸收の程度であつて、決して血となり肉となり骨身に滲みる所謂體得された知識は得られないのである。實習教育は技能の修得だけだなど云ふ教育家は技能の何たるかを知らない人々で、知識の精髓が技能で、技能の中には之れにあらゆる必要が純化包含されてゐることを知らざる人々である。

農民講道館の教育は精神教育、知識教育、技能教育の三者を打つて一丸としたる融通無凝の教育であつて、此の三者こそ鍛錬し修錬する實習教育に依つて最も有効適切に體得出來るのである。重ねて云ふ所謂教室教育を打破することが農民講道館の教育の本領であり、同時に教育革新の大目標であらねばならぬ。

5 販賣購買

經濟的訓練が農民講道館教育の二大目標の一であるから、此の點に就ては特別の訓練をする。

其一は前述せる月白米三斗による共同自炊の實習で、此れによつて農家の消費經濟の中の重要部門の一たる食物に關する經濟上の體驗が得られるのである。食料品、日用品、薪炭等の價格、消費の實際を知ることは人生生活の第一歩であり、農家經濟革新のスタートである。

其二は飼料肥料の購入で一大農業を經營する農民講道館としては勿論、現在の農家の經濟としては重大中の重大事である。此等の飼料及肥料を出來るだけ自給自足にすることが今日農家經濟の急務だから農民講道館の教育としては出來得る限り飼料肥料の自給化を專念してゐる、從つて飼料としては飼料作物の栽培、精米製粉の實行により米糠フスマを出來るだけ多量に得る方法を研究し、又大宮の鐵道宮舍其他の方面に殘飯廢物を入るる容器即古醬油樽を一戸毎に配布し、毎日生徒をして集めさせ、或は大宮驛其他に集る藁、ごみ等を掃除すると同時に無償讓與を受け、競馬場の敷藁等苟も手に入るものは勞を厭はず集めてゐる。又塵芥箱も官舍を廻はつて館生が集めて、其中薪物に役立つものと、堆肥の材料になるものと區別して、薪物は飼料を賣るに用ゐる。

購入飼料としては出來るだけ廉價に且品質よきものを得る必要があるから、米糠は陸軍糧秣本廠より、フスマ、麥糠は製粉精米工場より直接に、醬油粕は附近工場より直接に、

混合飼料大豆粕、魚粉、蠣殼等は市價を調査して最も廉價に品質よきものを購入してゐる。肥料は全購聯を本體とし、又三井其他の肥料問屋からも購入する、要するに價格と品質量目の三點から各方面を研究して最も有利の所から購入するのである。之れには運賃の關係が大切で本館は東京に近いし道路がよいのでトラツクの使用が利益で東京迄一噸半一台五圓、横濱迄八圓で八百貫位は優につけてくる。此の肥料飼料の購入は館長たる自分の重大の仕事で充分研究してやつて居る。農家として此の肥料飼料の購入が最も大切のことであるから、一家の主人が直接此れに當らねばならぬ、生徒にも此の點は充分に教育訓練する。

其三は生徒自身の日用品の購入で、シヤツ、足袋、筆墨、手袋、齒ミガキ粉等の日常の必需品は前述せる産業組合の購買部で毎日時刻をきめて午後零時半から一時迄と夕食の休息時とに販賣する。此の産業組合は勿論、生徒の自治で仕入れは全購聯其他からする。

其四は生徒の生産物販賣實習である。農業の關ケ原の戰爭は生産物を賣る時にあるから此の生産物の販賣は本館教育の重點で他の色々の學校と大に異る所である。之れに本館は東京市始め大宮、浦和等都會地を附近に擁して居るから此の點は非常に便利であると同時に抑々農民講道館が他の革新的教育機關と根本的に設立の基本を異にする要點である。

何故に都市の郊外に位置を定めたか

國民高等學校を始め多くの革新的教育機關は其學校の位置が都會地を離れた所謂人里離れた所にある。山を控へ川に臨むと云ふ具合で成るべく閑靜の土地を選み、其理由は環境の善い所と云ふにある。從つて生徒の教育上環境は人里離れて極めて善いかも知れないが、農民道場の修行に最も必要な農業の經營、生産物の販賣處理及購買物の購入には非常に不便で、經濟上から見ると全然落第である。成る程環境の良好の所も必要には違ひないが、現在農民の最大の缺陷である農業經營の訓練教育、殊に生産物の販賣、肥料飼料其他必需

品の購買等が不便至極では其農業經營は全然成立しないのである。現代の農村及農民の缺陷が此の點にありとすれば苟も革新的教育である以上此の點に主力を注がねばならぬ。而して此の生産物の販賣必需品の購買等を有利に行ふには是非共農民道場の位置を人口三万以上の都會地附近に求めねばならぬ。斯くせねば此等の鍛錬修錬は出來ぬのである。農民講道館や香川縣の農事講習所や愛知縣の種畜場が他の革新的教育機關と異つて萬難を排して都會地の附近に位置を定めたのは此の理由によるのである。吾等の經驗から端的に云ふなれば世間の革新的教育機關が其位置を人里離れた僻地に選む主因は勿論環境の點もあるけれども、事實は都會地附近に選むのは非常に困難を伴ふからで、上述の樣な僻地ならば第一敷地と實習地が得易く、此等を得るに比較的苦心努力を要しないからである。自分の經驗によると此の敷地と十町歩以上の小作地とを成るべく周圍に集めることは非常に困難のことで、香川縣では琴平附近は小作料反一石四斗平均然も耕地面積が一戸平均五百以下で小作人は全國有數に多いから、此の小作地を得るには並ならぬ苦心をした。又埼玉縣でも與野町は上野から省線電車で四十分位の所であるから、且又東京から十三間のコンクリート道路が通じて居るから、市街宅地同樣で敷地並に小作地を得るには香川同樣に困難で兩地共設立の相談の時には異口同音に耕地獲得の不可能を忠告されたのである。けれども自分は常に信じてゐる、世の中は熱である、意氣である、努力である、既に土地はある。土地がなければ問題にはならないが土地がある以上地主が耕すか、小作人が耕すか、肇者が小作するか三者其の一である、而して其熱に於て努力に於て意氣に於て筆者斷じて地主小作人に劣らない、又知慧に於ても資力を集むることに於ても、少くとも優らないとも劣る心配はない。已に戰の旗は高く揭げられたのである、唯前進あるのみ、突擊あるのみ、世の中は至難とか不可能と云ふ時に人生のスタートが始まるのである。困難や障害のない所に人生はない。總ては覺悟の前だ、いでや、人間の有する眞の熱と意氣と努力とを最高最大

限度に發揮して見ようと云ふのが吾等の念願であり決心である。香川縣では內務部長として午前十時から午後十二時頃まで三、四日一室に坐つて地主小作人を說いた、一週間の豫定が三、四日で成功してしまつた、その代はり夕食ぬきでぐん〳〵やる、結局は熱と根氣だ、夜の九時から十時頃になると農民は流石に腹が減つてくるから陷落が早い、承諾した小作契約證に捺印させる、此場合彼等は必ず歸宅して印を持來すると云ふが、捺印前に歸宅させたら萬事休するである、確に捺印するかと念を押して捺印すると云つたら拇印が一番確だと云ふて拇印を捺させる、もうこうなれば嫌も應もない、拇印を捺したら香川縣なら甘土料の二割位を直に渡す、金を受取らば覺悟はきまる、此の金は役所の金で渡せないから、自分の金を五百圓ばかり用意して臨んだ故、造作なく事は運んで仕舞ふ、人間は妙なもので內務部長が個人として一時でもなけなしの金を投げ出せば傍に見てゐる村長や產業組合長も共鳴するもので、香川縣の場合は村長連が何所からか直に金を見付けて

來てくれた程である。埼玉縣でも同樣である、もう自分は千里を行くつもりで覺悟してゐるから案外容易に出來た。勿論此れには一年以來の用意努力と有志者の並ならぬ共鳴があつた賜でもある。それでも難題を云ふ人の所には盛夏養蠶の最中に七回訪問して、隨分色々の目にも遇つたが、結局は目的通りに行つて土地はまとまつたのである。

貰つて得たものに錄なものはない。世の中は努力して取れ、戰つて取れ、努力し戰つて取つたものなら始めて血になり肉になり、我ものになるのである。丁度滿洲移民が北滿の曠野を選んで農業する樣なもので、土地が安いか乃至は得られよいから北滿を選ぶので、農業した後に生產物が賣れるか、子供の學校はどうか、醫者はどうか、日用品はどうするか、皆目闇である。折角農作物は出來たが、道路の惡いために運賃が時價の二倍かかつたとか、途中で荷馬車が動かなくなつて滿載の野菜物が腐つてしまつたと云ふ話は一、二ではないのである。日本でも滿洲でも、勤勉なる農民が太古から棄てて置く土地はよく〳〵

役に立たない位のイロハのイの字程度のことは夫等の人々にも解かりさうなものである。要するに仕事の始めに易きについて、樂をしてやる仕事に餘り價値のある仕事はなく、後で二倍三倍の苦みをするものである。

環境の善惡も勿論教育上必要であるが、人間は人里離れた山の中にのみ生活出來るものでない、學校を卒業すれば直に活社會に出るのである。都會附近で教育出來ぬなどは久米の仙人の云ふことで、婦人の脛を見たら半生の修行が一瞬に崩れてしまつたでは何もならぬ。稻でも麥でも善い種類は病氣に犯されぬ抵抗力の强い品種を作り上げるにある。都會地の空氣を日常吸つて尙且つ此れに溺れない人間を作るのが眞の教育ではあるまいか、我々は活社會に住むのだから活社會にあることをせねばならぬので、奇拔だとか、面白いとか云ふ程度の趣味的の仕事ではない。農業を教ゆるにも、人間を鍛錬するためにのみ農業をやるのではない、人間を鍛錬し修錬すると同時に人間の生くるために農業をするのである。昔の祿を食んで、生活の心配のない武士や學者が晴耕雨讀など稱して文藝的に農業をやるのでは斷じてない。食ふに困まらぬ人々は運動の爲めにも、趣味のためにも農業をやるかも知れない。之れは惡いことでなく自然に親むことだから大に善いことではあるが、眞の農業は生くるためにやるので、武士や學者が片手間に農業をやるのとは全然其目的精神が異るのである。晴耕でもない、雨讀でもない、晴れやうが降らうが、暴風雨が來ようが、生くるための農業なら、會釋なしである。農業實習を心身の鍛錬の爲めにやる程度では龍を描いて睛を點ぜざるもので、心身の鍛錬と共に生くるために奮鬪努力する點に於て茲に明確なる不動の目標が確立するのである。人生の仕事は面白いとか、奇拔だとか云ふ程度ではまだ駄目である。人生は平凡である、而して此の平凡の中に千萬無量の含蓄があるのである。

農民講道館の生産物の處分は、大量のものは東京市の市場協會、デパート方面に販賣

する。成程度日常の野菜、雞卵、乳等は大宮浦和の官公舍、鐵道の購買組合や寄宿舍に販賣する、其方法に就ては前述した鐵道官舍等に殘飯其他の殘り物を入れるために一定の容器を各戸の勝手に配布して毎日片付けに行く際に野菜其他の御用を聞き配達するのである。山羊乳及牛乳は赤十字病院、縣廳、食堂、官公舍に配達して若し餘れば東京の鐵道ホテル其他に賣る豫定である。花卉や高等野菜は東京市の中央市場やデパート等に賣る。

豚肉も枝肉が有利ならば屠殺して枝肉にして東京市に供給するし、廢雞も屠雞にして賣る方が羽毛も利用出來るし、肉價も高いのである。同時に生産物は生で賣ると同時に加工もして調節を計るのである。鷄卵や雞、豚肉の販賣方法としては附近に大宮驛關係者の鐵道購買組合があるから、一週に二回館生が出張して販賣する、約二千五百の組合員がある。

此等の訓鍊は充分にして生徒に體得せしめる。

5 流汗講習

二ケ年通じての本科生の外に臨時的の流汗講習がある、三十日乃至五日間短期講習をする。此の流汗講習は平素農村で農業經營に實際勤勉努力して居る人々に更に農民精神の鍛冶修鍊を圖り併せて農業經營の實際を體得させる目的を以て、本館に於て一團を組織して短期講習をするのである。流汗講習の要點は敎へるに非ずして働くことが主眼である。

一、一團體たること、人員は三十名以上百名以内

二、講習生は白米一日に一升、實費一日十五錢、携帶品は作業服、簡易雨具

人員の數は餘り少いのはいけないし、又餘り多いのもよくない。三十名から五、六十名がよい。携帶品は作業服に簡易雨具と外に特定の農具が入用の場合がある。例へば開墾の際に開墾鍬が必要の如きで、普通の農具は本館に用意してある。白米は一日一升で、此の一升に依つて一日の炊事全部をやるので、平均一日六合が食米で、殘り四合が副食物代である。實費一日十五錢は電燈料、寢具代、入浴費等である。作業講義等は本科生の日常と同

様で、本科生が各部隊の三分ノ一位混合して、此の本科生の通りに行動するのである。唯流汗講習の際には講演は本館の關係者として知名の人々例へば馬場鉄一、荒木貞夫、伊澤多喜男、德富蘇峯、三土忠造、藤原銀次郎、大川平三郎、山本條太郎、佐藤寛治、月田藤三郎、新井堯爾、十河信二、東郷實、千石興太郎、岡田溫、石坂表平、出井兵吉、膳柱之助、金子喜代太、諸井貫一、渡邊得男、鈴木貞一、矢野恒太等の諸賢の外各方面の實際家が交互に講演することになつてゐる。卽午前五時乃至六時から一時間は實際家、午後一時から一時間、夜七時から一時間乃至二時間は名士學者の講演である。此の五日乃至三十日間本館の道場に於て生活し鍛冶修錬さるることに依つて、農業經營の實際は勿論農民精神の鍛冶發揚に依つて人生の何物たるかを體得するのである。志ある人々特に農村の中堅青年が遠近を問はず所謂笈を負ふて遠く遊ぶの氣持に依り、一堂に會して切嗟琢磨することが大なる人生の修養になり又機緣になるのである。一週間の共同生活に依つて、志ある未知の人々が互に相知り、相結んで斯くして日本の農村の更生も、國家の革新も芽ばえるのである。五日や一週間の講習ではもの足りないと思ふかも知れないが人間には反省發奮の機會が必要なので、つまり端緒をつくるのである、目標を建てるのである。此の目標と端緒が出來れば茲に眞の人生が始まるのである。斯くして一村から一、二名宛參加すると其村に數年ならずして同志の有力なる團體が農民講道館の流汗會を中心にして出來るので、此れさへ出來れば其村の更生は飛躍的に進むのである。流汗會員が一村に十名一縣に千名も出來れば此れ程有力な活力ある團體はないのである。

6 流汗會

此の流汗講習會を修了した者は流汗會に入會の資格が出來る。本科の卒業者は勿論である。流汗會は所謂農民講道館の同窓會で、一旦農民講道館の敎育を受けた者は互に結束し一團となつて親睦修養を圖るのである。一年一回總會を開き一泊講習をやる。總裁は農

民講道館長で會長以下は會員の互選に依る。普通の農學校や各種の學校の同窓會などとは雲泥の相違で、單に學校を卒業したからと云ふのではなく、同氣相求むる精神的の團結で、云はゞ同志の團結である。此の流汗會員は年々數百名宛を加へて、流汗講習會は年數回やるから十年を出でずして巨然たる大團結になるのである。

此の流汗講習會は農村の青年丈でなく、夏期暑中休暇の際には實業補習學校や小學校教員のために白米三斗の一ケ月講習をやる。此れに依つて農村教育者の鍛冶修錬をやり、實業補習教育、小學教育の根本的革新を圖るつもりである。

7 農村教育革新協會

農民講道館教育の全國的普及を主たる目的として農村教育革新協會がある。本協會の目的は

一、農民講道館式教育普及のため中心人物の養成

二、農民講道館式教育相互の連絡助成

三、農民講道館入學者の學資補助

四、講演、出版

等で、第一の中心人物の養成は本協會の主目的で、將來斯種教育は全日本を風靡し又風靡せしめずんば止まないのである。斯種教育の普及發達如何は一に中心人物の存在によるのであるから、此の中心人物の養成は何より今日の急務なのである。然るに天下は人多くして人少しの譬に洩れず、眞個一事を託すべき眞人は寔に寥々曉星の如しであるから、特別の用意を以てするに非れば中心人物の發見養成は眞に至難なのである。今や農民道場の聲は時勢の影響と政府の奬勵とに依つて寧ろ雨後の筍たらんとし、所謂一夜造りのインチキが流行せんとする危險がある。農民道場の如きは自分の經驗に依ると、至難中の至難事で、到底官僚や所謂教育家の手に出來るもので斷じてない、今日の官界の如く主腦者が一

年二年で雁去り燕來る底に去來しては、終始一貫せる永遠不朽の事等は到底夢想だに出來るものでなく、前任者の仕事は得て破壞し勝な惡い氣風のある官界に於て、又大臣や知事や乃至學務部長などの各個人〳〵に氣に入る樣な迎合的緣日商人氣質の敎育では眞個の敎育は出來ないのである。不動の確信と鋼鐵の如き信念とを有する不羈獨立の人物が骨を埋むる底の大決心大勇猛心なしでは一山の道場は絕對に建立出來ないのである。此の點に於て、古來の神社佛閣と同樣、民間の篤志家の力に依つて農民道場は建設せらるべきもので、官公立では堅實なる發達は全然不可能とは斷じないが頗る至難事なのである。卽農民道場は財團法人乃至一個人の經營を原則とせねばならぬ。

此の中心人物を得る方法としては、類は自然に集まるの譬に洩れず、玆に農民講道館が武藏野の一角に巨然として不動磐石の位置を築く以上、天下の同志は自ら集まるので、又自分始め同志が講演其他に依つて各地を遊歷すれば各地に自ら同志ありで、自然と中心人

物たり又中心人物たりうる人材を發見し得らるるから、此等の人々を農民講道館で半年或は一年鍛錬し指導すれば、玆に農民道場の中心人物が養成されるのである。而して此の中心人物を他地方に設立さるべき農民道場の創立者や幹部に送つて、微力ではあるが自分始め同志が五割の責任を負つて應援指導するならば第二、第三の農民講道館が建立されるのである。卽埼玉縣與野の農民講道館が大本山となつて全國各地に農民道場の普及を計るのである。

第二の農民道場相互の連絡或は助成も極めて必要で、創立早々の農民道場の指導應援は同志の連絡が一番有効である。農民道場を新設する場合に中心人物を得ることは勿論、建築設計にしても、農場及畜舍其他道場の內容經營にしても經驗のない人々がやるならば、二倍の經費を使つて尙且つ不完全のものを作るので、世間今日滔々として然りである。卽最初の計劃、位置、內容等が無經驗のために、致命的のものすら少くない、又資金等の助

成にしても信用あり經驗ある同志の結合による協會の力を以てすれば比較的資金の獲得が得易いのである。天下は廣大である、一千、一萬の資金も容易に得られない今日の社會でも又一方に如何にして自己の財產を天下に散ぜんとして苦心して居る人々も又少くないのである。此等の民間の篤志者に淨財の道を敎へ、又政府官界の人々に公費を有効の方面に使用する機會を與へしめるのも本協會の仕事である。

第三に貧困有爲の農村子弟を農民道場に入學せしむるために學資の補給するのも極めて必要で、今日眞面目なる農家の子弟で、學資なくして惱んで居る者も少くなく、斯かる子弟を農民道場に入學させることは農村更生上最も肝要であるから、學資補助の道を講ずるのである。大學や專門學校の學資補助ならば半額として月二十五圓程度要するのであるが、農民講道館なら半額なら月五圓で充分で、大學專門學校の補給一人分で五名を出しうるのである。然も卒業後就職難などの心配はなく、各家に歸つて働くのだから此れ位堅實の育英はないのである。卒業後就職難に泣く虛榮の育英事業よりも、農民講道館入學の育英事業の方がどの位僅少の經費で國家的であるか知れないから、大方篤志家の發奮を促したい。

第四の講演出版は斯種敎育の普及並農村更生の爲めに必要なる講演及出版物の謂で、各地の要求に從つて講演者を派遣するばかりでなく、本協會としても出張講演會を開くのである。又此等目的達成のため有益なる參考雜誌等の出版をする。

8 農民講道館の建築

農民講道館の位置に就ては前述せる如く、人口三萬以上の都市から一時間以內の距離で交通便利の地點たることを要する・生產物の販賣、必需品の購入等の見地からは勿論、視察者の便利の地點を選ばねばならぬ。此の點は農民道場建設の主眼點である。

第二に建築は出來るだけ質素堅牢本位にすると同時に敎育作業に便利に簡單に造ること

が大切である。元來今日迄の學校建築の一大通弊として、其設計は教育に關係のない建築技師の設計本位で、教育者自身が設計するものは殆んど少いし、然も其建築が教育本位でないばかりか、不便で且つ最も惡いことは經濟を無視した點である。教育作業の見地から建物の構造位置がきめられないで、建築技師の趣味建築眼からのみ決定されるから甚しく非教育的で且不便不經濟である。然も學校だからと云ふ頭で建築の經濟を構はないのが多く、實用堅牢の點は左程顧みられないので、外形の裝飾形式だけに金を使つてゐる。

現今教育の第一義は經濟的に確固たる根柢を置くにあるのだから、學校建築の第一義も亦出來うるだけ經濟本位であらねばならぬ。此の點から見て今日迄の學校建築は大體に於て落第である。

農民講道館の建築は此の點に於て細心周到の注意を拂つたつもりである。又建築の順序方法も實際本位で、昭和八年の八月二十三日起工して昭和九年三月二十日溫室を除く建物は左の如く完成したので、其建築に要した日數でも政府や府縣の工事に比べたら二分ノ一乃至三分ノ一である。此の建築日數の長いことは色々の點で不利益で、物事は始める迄は研究が大に必要だが始めたら一氣可成にやらなければほんとうの仕事は出來るものでない。牛の涎の樣にだら〳〵では始めの熱も意氣もぬけて、善い加減のものになつてしまふ。農民講道館の建築の順序は堆肥舍、農舍、畜舍、職員住宅、事務室、寄宿舍の順序で農業の經營に必要のものから先にして、間に合ふものは間に合はせて、間に合はぬものから先に始めた。卽堆肥舍は昭和九年四月開館ではあるが、作物の關係上又小作地を得る上からも昭和八年の麥作から堆肥が必要だから第一に作る必要があるので、九月廿六日の堆肥速成講習會に間に合ふ樣に作つた、又講習をやるにも作業をやるにも農舍が必要だから、此れも十月二十日迄に作つた。農舍は熊谷工業試驗場の機織工場の廢物で、坪三圓七十五錢で百坪のものを買つて建てたが、材木は頑丈で農舍には全く誂ひ向きの建物で坪二十圓

で完成した。斯くて、九月二十六日に八十五名の流汗講習生に依つて一日に堆肥、石灰窒素を用ゐて藁による堆肥四千貫が出來た。十月八日に二十五名の流汗講習生の手で堆肥の切り替へを行つた。十一月九日から五日間の流汗講習で、五町歩の小作地の耕地整理と麥四町三反歩、果樹七反歩の作業が完了した。此の時百五十名の流汗會員及關係者は農舍、畜舍等のコンクリートの上に疊を敷いて五日間生活した。炊事場は豚の飼料調製室、浴場は種豚舍が理想的で、疊七割五分に一人宛寢たが元氣は實に旺盛のものであつた。講師は自分の外に實際家が六名、失野恒太、馬場鉄一、千石與太郎、鈴木貞一等の諸賢であつた。館生に四月から必要の澤庵四斗樽三十本、味噌醤油一切は十二月十四日の講習で出來上つた。一月下旬から三月にかけて雞豚が入り、役牛は二月初めから勞役に忙しい、堆肥も始めから四月中旬迄に約一萬五千貫出來た。住宅は埼玉縣立久喜高等女學校の寄宿舎を買つて坪二十圓で三戸分出來たから職員赴任と同時に入つた、職員は一月始め全部赴任して、

畑の作業や開館の準備に忙殺されてゐる。フレームだけでも百五十坪程ある。四町歩の夏作の苗床である、飼料肥料の購入は前述の通りで此れもなか〳〵手と頭がいるのである。雞卵も二月初めから賣り出してゐる。精米、製粉、粉碎等の電力利用の作業場も三月初め開始して、生徒の入學は四月一日だが三月一日から既に五名程假入學を許可して、午前五時半起床道場生活を始めてゐる。砂利は埼玉縣廳から一手に、セメントは淺野セメント會社から一手に、割引値段で購入、工事は殆んど直營で出來るだけ經費を少く堅牢と便利本位でやつた。此れには農民講道館の教育に衷心共鳴して埼玉縣技手を辭して、獻身的に設計監督された池田昇氏の努力の賜は實に大きい。世の中は人である。眞個の建築は建物ではない。人間の精神の結晶であり、精魂である。農民講道館の建築一切は物質の建物でない、筆者始め同志の全精神の結晶であり、熱と意氣と努力の結晶である。人若し來つて農民講道館の建物や形式を見んとするならば、彼は遂に其十分ノ一をも見得ないであらう、

一切の形式一切の外形の奥深く埋れてゐる人間の精神の何物であるかを、而して人間の血と涙と汗とを靜に體得しうるならば、彼は始めて若干農民講道館の何物たるかを知りうるであらふ。ローマは一日にして斷じて出來るものでない。

三月二十二日より七日間に亙る流汗講習會に依つて茲に一切の開館準備を終つて四月一日から農民講道館の第一歩を始めたのである。三月二十二日からの流汗講習會によつて八反歩の開墾、一町歩の水田耕起、五反歩の桑園の植付け、三反歩の茶の播種、五町歩の麥の中耕、切花用植樹を敷地及畑の周圍に二萬本栽植、馬鈴薯の播種、溫室土臺のコンクリート打等一切が出來上つた。講習員百十名、流汗會員も總計三百餘名に上つた。

此の流汗會員は昭和八年九月以來、六ケ月ならずして既に開館前約三百餘名に上つたが、此等は講習の期間は極めて短くとも、普通の學校の同窓生などの形式的のものと雲泥の相違で、同じ竈の飯を食つたのだから、又志を同うして自發的に集まつたものだから、其結束は極めて鞏固のもので所謂意氣を同うする同志の團體である。

農民講道館の建築の種類、坪數、は左の通りである。

建築概要

神社			一殿
本館及寄宿舍	木造二階建	建坪	二七五坪
收納舍農具舍及稚蠶飼育室	同 平家建	同	一二七坪
倉庫 肥料庫	鐵筋コンクリート造平家建同		三二坪
堆肥舍	木造腰壁鐵筋コンクリート造		四五坪
水肥舍	鐵筋コンクリート四〇石入		四ケ所
屋外堆肥舍	コンクリート敲床		四五坪
種豚舍	木造平家建 二棟	建坪	七八坪
肉豚舍	同 二棟	同	九七坪五合
雞舍	同 二棟	同	九〇坪

育雛舍	木造平家建	一棟	建坪 四五坪
雞飼料舍	同	一同	同 二一坪
豚飼料舍	同	一同	同 一五坪
鷄糞乾燥場	コンクリート敲床		一五坪
孵卵舍	木造平家建	一棟	同 九坪
牛舍	同	一棟	同 七坪五合
山羊舍	同	一棟	同 二五同
山羊飼料及處理室	同	一棟	同 九同
溫室	鐵筋	一棟	同 一二〇同
フレーム			二五〇同
サイロー	五百貫入		四ケ所
給水鐵塔及水槽	高サ 卅尺	二四石入	一ケ所

建築は約五萬圓、備品家畜購入費約一萬圓である。

9 暑中休暇全廢

農學校や農村の小學校、中學校、高等女學校等に土用四十日以上の暑中休暇があるなどは錯誤も甚だしい。暑中は萬物生々發展の時で、農作物の實習には夏程よい時はない。夏こそ農學校の書き入れ時である。此の時こそ全能力を擧げて鍛錬し修行すべき好季節である。日本の農學校が暑中休み四十日もやるなどは誠に昭和時代の珍風景である。農村教育革新の第一歩は實に暑中休暇の全廢である。暑中休暇などあるから農學校の實習は振はないので、從つて農學校の全教育が中途半破のものになつてしまふのである。前述せる如く農學校の教育の第一義は農民精神の鍛冶修得にあるので、又技能の修得も土用が最好季なのである。農學校の實習がほんの申譯的であるのも主として暑中四十日生徒が留守になるからで、近頃交替的に生徒を暑中召集をするが、交替的などは不徹底も甚だしい。平素八時出勤ならば暑中遲くも七時出勤にすべきである。現在の農學校に暑中休暇を全廢するこ

とに依つて農學校の教育が飛躍的に革新出來るばかりでなく、上は大學から下は小學校に至る迄此の影響は非常に大きいので、文政當局の教育方針が愈々根本的に覺醒されたことが明白となるが故に、卽從來の興味中心の形式非實際の軟教育が、鍛冶修錬する實際生活に卽した硬教育に轉換した最もはつきりした信號となるから、蓋し黑船同樣の曉鐘となるに違ひない。

農村に於ける小學校、中學校、高等女學校、商業學校、工業學校も同樣で、暑中休暇の必要は全然ない。元來夏暑いから休むなどは全く不自然の話で、暑さを凌ぐ最上の方法は金持ならいざ知らず、普通の人々には暑さを避けるなどは贅澤の話か不可能のことで、最も理想的の凌暑の方法は眞劍に働くことで、依つて以て暑さを忘るるにある。工場の職工が暑中眞黑に働いて居り、又農民が汗みどろになつて耕作して居り、或は學生が一時二時の炎天にテニス、ベースボールを嬉々として練習して居るのも、側の人々から見れば誠に身のよだつ程暑い樣に感ぜられるが、當人達になつて見れば寧ろ眞劍の人程暑さを忘れてゐるのである。要するに暑は避くべきものでなくして進んで忘るべきものである、青年や少年の活氣潑剌たる人間に夏は暑いから日蔭に居れなど云ふのは、全く老人連中の考だけで、本人達はぢつとして日蔭に居るのが却つて非常に苦痛なのである。夏一番暑さを感ずるのは工場や農圃で眞黑になつて炎天に働いて居る人々でなくして、却つて煽風機や左團扇で奥坐敷に寢ころんで居る閑人である。暑中休暇を最も希望する者は生徒兒童にあらずして寧ろ教師其人であると云はねばならぬ、要するに夏や冬は人間を鍛冶修錬する最好の季節で古來暑中稽古、寒稽古と稱して武道を勵んだのは此の意味からで、酷暑嚴冬の節こそ眞に人生修行の最良の道場なのである。從つて暑中休暇は全廢して暑中は寧ろ積極的に暑を忘るる方法を研究すべきで、夫れには眞劍に眞黑になつて勤勞努力する外に方法はないのである。卽農村の小學校や農學校を除く中等學校では暑中休暇を廢して寧ろ農繁休暇の制度

を設ける。農家の忙しい時は冬であらうと春であらうと何時でも必要だけ休むのである。例へば春蠶の四眠から上簇時期、麥刈りの時期、田植時期、秋蠶晩秋蠶の繁忙期、米收の穫時期等で地方地方の狀況に依りて適宜に休暇とする、其權限は小學校長や中等學校長に一任する。而して暑中でも農家の繁忙でない時は平素通りに學校をやる。寧ろ早く朝七時位に開校してみつしり暑中稽古の決心でやらせる。暑いから二時間早く切り上げるなどはいらぬ心配で、苦しい困つたと云ふ時に鍛錬するのが眞の人生である。老婆的教育は青少年には絶對に禁物である。此の意味から云へば尋常二年以下の兒童には暑中休暇も農繁休暇も全然不必要で、農繁時などに休まれては家庭の厄介此の上なしだから農繁時には託兒所の延長として却つて足手まとゐにならぬ樣に、學校に早くから通學させる樣にする。元來日本の農村の小學校は授業時間が長すぎるので、農業にせよあらゆる技能教育は少年時代からの練習が肝要で、少年時代から始めねば決して熟達しないのである。殊に農業は勤

勞が第一で、愛農心の涵養が根本であるから出來るだけ少年時代から農業に手傳はせて、農業を樂む習慣をつけねばならぬ。然るに明治教育となつてから、此少年時代から農業に手傳ふ美風を非常に打破つてしまつたから、今日の樣に惰農をつくることとなつたのである。夫れ故小學校時代から出來るだけ農村では農業に手傳はせる樣に小學校教育を革新せねばならぬ。それには農繁休暇が最もよい方法で、草刈にせよ、家畜の取扱ひにせよ、少年時代が最もよい練習時期である。中學校や高等女學校でも同樣で、今の農村の中等學校は全國劃一で、上級學校の入學豫備校本位であり、又都會のお嫁の養成校だから全く農村教育としては落第である。中學校、女學校に農業科を置いて二、三町歩の農業經營をやらせるか、農繁休業を作つて農繁時に家庭でみつしり働かせるに限る。父兄が眞黑になつて働いて居る時に子供は暑中休暇だから、海だ山だと贅澤すきる。平素親の脛をかぢつて居るのだから、此の時とばかり農繁時には眞黑になつて働くことが非常によい教育であり修

行である。都市の商業學校や工業學校でも此の方針で、商工業の忙しい時に休暇を取つて暑中など何も休む必要はない。要するに教師本位の暑中休暇全廢は教育革新の第一歩である。

農民講道館は夏は午前四時半起床だから、平素よりも一時間早く起きて、一時間以上遲く迄働くから、前述の要求にぴつたりはまつて居る。暑中第一の方針て鍛錬し修錬するのである。又平素も毎月一日十五日を休暇とし、日曜毎に休むことをしないのである。此れも普通の農家の生活と同様の方針で、一日十五日二度の休暇にしたのであるが、此れも忙しい時には休暇を廢して閑の日と變へるのである。都會は都會、農村は農村、何もアメリカ、ドイツの眞似ばかりが能ではない。日本の國情に適した様にずん〳〵革新すべきである。農民講道館の教育は此の點に於て農家の生活、農業の實際と一對してゐるばかりか、更に徹底したものである。

11 實習以外の授業

實習の内容に就ては前述したが實習以外の授業は一日平均二時間で一時間が人生道話、農業經營、時事解説、歴史地理等で館長の受持であり他の一時間が栽培、肥料、家畜飼育、養蠶、農産加工等の授業である。尚夜間館生六名（同室の者）位と館長が座談會を催し、懇談的個別的に指導教育する。今日の教育は特に此の個別指導が缺けて居るから、一ケ月に二回位は館長が小人數一室に集めて懇ろに指導するのである。又此の外に實務家及篤農家の實驗談と名士の講演とを一ケ月各二回宛やる。實務家とは縣廳其他の經驗あり技能ある專門家の謂で、篤農家は農民講道館の囑託として十數名あるから此等の人の實驗談を聽く、名士の講演は農民講道館の同志の中から輪番にに夜間日曜土曜日等に講演し且館生と懇談の機會を作るのである。趣味と志を同うする名士先輩の熱のある指導だから、通り一片の所謂肩書名士の講演と雲泥の相違である。從つて此等實務家、篤農家名士の話の後に

は時間の許す限り懇談質問の機會を作る。只聽くだけでは効果が少い、聽いて解らぬ所を、又平素疑問のある所を質すことが、生きた學問である。斯様に懇談質問に依つて、名士先輩の人格的感化を受けるのである。

雨天の際には屋内實習をやる外に、授業時間を適宜增すのである。又農繁の時には授業時間を減少する。

12 農民講道館の娯樂

農民講道館には娯樂がない、如何にも勤勉努力一點張りの堅苦しい生活のみではないかと云はるる人々があるかも知れないから、一應農民講道館の娯樂なるものに就て述べて見よう。

農民講道館の娯樂の第一は働くことである。此の意味が充分に味へない人はまだほんとうに働いたことのない人である。勤勞努力を苦みと一圖に解釋する極めて氣の毒な人々である。氣の毒の人々ではあるが、然し斯様な程度の人々が實は社會の大多數なのであるから人生を苦の社會と斷定して、樂しい愉快な人生を苦の娑婆などと自ら苦の世界にしてしまふのである。働くことは樂である。此の一句は眞に働いた人のみに與へらるる天の福音である、神の惠みである。仕事に成功する秘訣は其仕事を樂むことであり、朝早くから起き夜遲くまで働かうが、眞魂打込んだ仕事なら、仕事をしたくつてたまらないのである。恰度兒童が遠足を樂んで遠足の前夜に嬉しくて〳〵わく〳〵する心持と同樣である。自己の職業、自己の仕事を樂むことの出來ない人間は人生の最大不幸兒である。而して自己の職業、自己の仕事を樂むことの出來る人々は上下貴賤貧富の如き境遇の如何は論外で、蓋し人生の幸福兒と云はねばならぬ。從つて世の中で仕事をするなら其の仕事を樂む境地にまで熱と意氣と力がこもらねば駄目である。如何に汗と膏にまみれようが艱難障害が眼前に山積しようが、恰も一万尺の峻峯を十貫目のリックサックを背負ふて喘ぎ〳〵ながらも此

の峻峯を征服して山頂に至る樂に燃えつつある登山者の氣持の如く、喜び勇んで、樂しみ此の中にありと云ふ心境で勇猛邁進出來るのである。蓋し此の境地に達して玆に始めて人生の事業は出來るので、大なる藝術も生れれば、大事業も成し遂げらるるのである。凡そ何事でも無我の境地に達することが一番必要であり、大切であるが仕事を樂むと云ふ心境は無我の境地の一部である。眞に志のある人間なら其仕事に對して働きたくて〳〵堪まらないのである。英國の現宰相であり、ヨーロッパ一流の大政治家であるマクドナルドは嘗てはイギリス勞働黨の首領であり、勞働者の味方であるが此の間の消息を喝破して左の如く述べてゐる。

働くことが人生の負擔であると考へるのは大に誤つた考である。働くことは人生の樂であると云ふ所にイギリス勞働運動の堅實なる基礎がある。

蓋し千古の至言で流石は丁稚小僧から大英帝國の宰相になつただけの人物の言葉である。元來働くことは苦みなど云ふ考へ方は、他から强制されて嫌や〳〵ながら働く人の心理狀態である。働きたくない人間が働かなければ生活出來ないとか、出世出來ないとか色々の理由に依つて止むを得ず働く人々だから、勞働は苦痛なのである。自發的でなく他動的なのである。希望に燃えて己の志業を達するために働くのではない。强制的に背後に迫る鞭の怖ろしさに働くのである。仕事自身に趣味がない、熱がない、意氣がない、生命がない。明日を樂んで寢に就きうる人は幸福である。人生須らく明日を樂んで眠りに就け。志ある人間なら、自己の仕事を懸命に努力する人間なら、必ず明日の夜の明けるのが何より待ち遠しいのである。丁度小學校の兒童が遠足運動會の前夜の氣持と同樣である。彼等は寢る時如何に明日を樂んで輝々たる希望にかがやき滿ちて血を湧かして居ることであらうか！

働くことを何よりの苦痛と考へて居る世の中の多數の人々は誠に氣の毒の極みである。

彼等は斯くして營々として自己の一生を不愉快千万に送る不幸兒である。樂しい世の中をわざ〳〵苦んで暮らす落伍者である。世の中を樂しく暮す第一の方法は己の仕事を樂むにある。己の仕事の中に希望と共鳴と感激と樂とを發見するにある。

休養も亦人生に勿論必要である。娯樂も亦固より人生に缺くべからざるものである。けれども休養と云ひ、娯樂と云ひ、物質的にせよ、又精神的にせよ、悉く兩者共に眞劍に働く人間に對してのみ始めて眞に味はるべき特權である。其の人が眞劍に働けば働くほど、休養や娯樂の眞味が解かるのである。平素怠けて居る人間には休養や娯樂の眞味は解からないのである。否寧ろ休養娯樂が苦痛に感ぜらるる人すら少くない。譬へば一定の職業なくして毎日〳〵ぶら〳〵遊んで居る人には日曜や祭日も何の感興もない所か、日曜祭日の存在すら氣がつかないのである。殊に從來一定の職業を持つて居た人間が急に無職になつた場合、その人が平素忙しければ忙しい程、無聊は實に堪へられない苦痛なのである。

此の意味に於て働くことは實に人生の幸福なのである。

要するに勞働は神聖である。勞働こそ實に人生に又人類に文明と文化と進歩とを持ち來す最も的確の原動力である。働くことは樂みである。此の意味の體得出來ない中は未だ農民講道館の教育が體得しえざる人々である。

農民講道館の教育は働くことは樂みなりの一句より出發する。

以上に依つて農民講道館の娯樂の根本義は說明した。此の根本義さへ味ひうれば農民講道館の教育全部が、全生活が自己の志業にいそしむ人々に對しては樂みなのである。此の根本義を基調として農民講道館の三、四附隨的の娯樂休養を說明するならば

其一は農業祭である。例へば道祖神祭、田植祭、收穫祭、端午節句、七夕祭、新嘗祭、神嘗祭等で、其の日は一日なり半日なり休んで夫々其時季に因んで農業の祭をするのである。此等の祭は古來から農村にあつて非常に農業上有意義の祭であり、農村の娯樂慰安と

しても大變價値のあるもので大に農村生活を霑はしたものであるけれども、近時ヨーロッパ文明の輸入と共に次第に等閑に附せらるるに至つたが、農村生活としては大に今後復活奬勵の必要がある。即農村の娯樂慰安は農村に即した農村生活と、密接な關係のものを選ぶべきで、近頃の樣に娯樂と云へば直に都會摸倣に走るのは、此等の奬勵者が內務省なり農林省、文部省なり、中央都會の人々が中心だから、得て都會式の娯樂慰安になり易いので、農村娯樂としては甚だ失當のものが多いのである。都會人の考へる樣な娯樂慰安を普及させようとするから、都市集中の弊を益々增長するので、農村生活としつくり合はないのである。さなきだに盲目的に唯々都會憧憬の農村青年や處女に都會娯樂をみせびらかすのだから、誠に以て危險至極なのである。農村には古來から農村に相應はしい夫々有意義の農業に因んだ娯樂慰安があるのだから、出來るだけ此れを生かして現代化し、農村本位の娯樂慰安にすることが目今の急務である。此の意味から農民講道館では大に此の種の農業祭を復活させるつもりである。

其第二は善良有益なる舊來の農村の慣習である。

從來の農村の慣習中に娯樂的慰安的の善いものがいくらもある。例へば農休み、十五夜十三夜、冬寒夜、惠比壽講等には夫れ〴〵簡素な用意をして職員館生一同樂むのである。此等の美風良俗を保存するのみならず、時代に應じて改善してゆくことが農村として大に必要な事である。

其第三は遠足である。花見だと云ふて何も雜踏黃塵の中に埃を吸ひに行くのみが花見ではない。時あつて山の麓川の邊に花見に行くのも善い。野や山の新綠を愛するもよい、或は紅葉を探るのもよい。職員館生が打揃ふて、二里三里の遠足をして、手製の辨當で山に遊び川に行き半日一日を樂むのも大いによい。近頃は都會の人々の間には此の遠足所謂ピクニックが相當流行してきたが、唯どうも金のかかる汽車旅行が多く、やれ溫泉だ、やれ名所

だと云ふ風で贅澤三昧の流行が多いが、今少し金のかからぬ野外のピクニツクの方がどの位健康的であり、團欒的であるか知れない、辨當なども手製で母や姉が一生懸命工夫してやる方が遙に經濟で又趣味があるか知れない。農村でも此の一家團欒の遠足が必要で丁抹やドイツやイギリスなどの農村ではなか〳〵此のピクニツクが農村の娯樂として實行されてゐる。自分がヨーロツパやアメリカの農村行脚をした際各所で日曜に出會はして如何にも愉快な光景だと感じたのである。旅行とか遠足とか云へば直に平素に不似合ひな金をかけることを計劃するのが農家の常だから、成るべく經濟的に金のかからないで、然も一家團欒的の企をする、此の點から農民講道館でも野や山で晝飯でも食べながら一年に數回遠足をする計劃である。

其四は茶話會座談會の催で、修養と同時に趣味的慰安的に月に二回位やる。此の時は職員の外に名士や篤農家等の加はることもあり又內輪同志のこともある。茶菓でも食べながら氣樂に夜を語り合ふのである。此の際時に依つては活動寫眞や蓄音器を樂むこともある。

先づ農民講道館の娯樂慰安と云へばかかる種類で働くことが卽第一の樂みなのである。

次に農民講道館の館歌、館則、法人の寄附行爲を揭げて閉卷とする。

農民講道館歌

作歌　横尾館長
作曲　アムール川譜

一

芙蓉の高嶺仰ぎ見る、
我等が學び舍打建てて、
此處武藏野の一角に
ひたすらいそしむ農民道

二

夫れ濁流は漲るも、
大地に響く鋤鍬の、

三

土に親み土に生く、
無言の業に人生の、

四

鐵をも貫く我が意思よ、
口舌形容何かある、

五

黎明の光既に見ゆ、
熱意氣努力一すぢに、

夫れ妖雲はたなびくも
力ぞまこと國の基

汗と膏に鍛へつつ
誠の道を學ぶなり

巖をも徹す我が力
實行、實行、實行ぞ

起て青年よ我が友よ
祖國の爲めにいざ起たん。

財團法人

農民講道館館則

第一章　總　則

第一條　本館ハ主トシテ實習勞作ニヨリ農村子弟ノ心身ヲ鍛錬シテ健全ナル農民精神ヲ涵養スルト共ニ農業經營ノ眞髓ヲ體得セシメ內地又ハ海外ニ於テ農業經營ノ實際ニ當リ得ヘキ中堅農民ヲ養成スルヲ以テ目的トス

第二條　本館ハ財團法人農民講道館ト稱ス

第三條　本館ハ埼玉縣北足立郡與野町ニ設置ス

第四條　本館ノ修業年限ハ二箇年トス　但シ特定ノ課目ニツキ短期ノ講習生ヲ養成スルコトアルヘシ

第五條　本館館生ノ定員ハ百名トス

第二章　學年、學期及休業日

第六條　學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第七條　學期ヲ分チテ前期及後期トス

前期　四月一日ヨリ九月三十日ニ至ル

後期　十月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル

第八條　休業日左ノ如シ

一、毎月一日、十五日

二、大祭祝日

三、本館記念日

四、冬期休業十二月二十九日ヨリ翌年一月五日ニ至ル

第三章　學科課程及授業時數

第九條　學科課程及授業時數ハ第一號表ニ依ル

第四章　入學、退學、卒業、試驗及賞罰

第十條　館生ハ左ニ區分シ尋常小學校卒業以上ノ學力ヲ有スルモノニシテ身體强健志望確實將來農業ニ從事セントスル者ヲ詮衡ノ上入館セシム

一、本科第一學年　年齡滿十七歲以上ノ者

二、本科第二學年　高等農林學校卒業者若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者

第十一條　入學ハ毎學年ノ始メニ於テス　但時宜ニヨリ臨時入學ヲ許スコトアルヘシ

第十二條　入學志望者ハ戶主又ハ後見人連署ノ上第二號表ノ願書ニ履歷書、戶籍抄本、身體檢査書及

市町村長ノ推薦書ヲ添ヘ毎年三月二十日迄ニ館長ニ差出スヘシ

第十三條　入館ノ許可ヲ得タル者ハ第六號表ノ保證書ヲ館長ニ差出スヘシ保證人ハ埼玉縣北足立郡又ハ東京市內ニ在住シ一家計ヲ立ツル二十五歲以上ノ男子タルヘシ

第十四條　保證人ニ異動アリタルトキハ其ノ旨館長ニ屆出ツヘシ

第十五條　館長ニ於テ保證人トシテ不適當ト認ムルトキハ變更セシムルコトアルヘシ

第十六條　館生病氣其ノ他ノ事故ノタメ退館又ハ休館セントスルトキハ其ノ事由ヲ詳記シ戶主又ハ後見人及保證人連署ヲ以テ館長ニ願出テ許可ヲ受クヘシ

第十七條　左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ退學ヲ命スルモノトス

一、性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二、怠慢又ハ成績不良ニシテ卒業ノ見込ナキ者

第十八條　本館ハ特別ノ試驗ヲ行ハス

第十九條　館生ニシテ本館所定ノ課程ヲ修了シタル者ニハ卒業證書ヲ交付ス

第五章

第二十條　授業料ハ一月金一圓トス

第二十一條　授業料ハ毎月二日本館ニ納入スヘシ

第六章

第二十二條　館生ハ總テ塾舍ニ入舍スヘシ

第二十三條　館生ハ毎月食費トシテ白米三斗及塾費金五十錢ヲ納入スヘシ

第二十四條　前二條ノ外塾舍ニ關スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

第七章　職員

第二十五條　本館ニ館長及職員若干名ヲ置ク

第二十六條　館長ハ館務ヲ總理ス

第二十七條　職員ハ館長ノ指揮ヲ承ケ館務ヲ掌ル

補則

第二十八條　本則實施上必要ナル細則ハ別ニ之ヲ定ム

第一號表　學科課程及毎月授業時數

科目	第一學年 課程	第一學年 時數	第二學年 課程	第二學年 時數
修身	皇國精神	八	同	八
地理歷史	一般	四	同	四
法制經濟	一般	四	同	四
農業	一般	一二	同	一二
農業經營	一般	四	同	四
體操	皇國體操	一二	同	一二
唱歌	志氣涵養唱歌			
時事解說	一般	四	同	四
實習	農場、畜舍、溫室、販賣、加工、工手	二〇〇	同	二〇〇

備考　一月二回以上名士專門家ノ課外講演ヲ行フ

第二號表　入學願書（用紙半紙）

私儀財團法人農民講道館第何學年ニ入學志願ニ付御許可相成度戸主（又ハ後見人）連署ヲ以テ此段相願候也

年　月　日

本籍

現住所

本人族稱職業　何某何男

氏　名㊞

生年月日

本　籍

現住所

族　稱

戸主（又ハ後見人）　氏　名㊞

殿

本　籍

現住所

氏　名

生年月日

一、何年何月何校卒業

一、何年何月ヨリ何年何月迄何々ノ實務ニ從事ス

一、賞罰ノ有無

一、何年何月入營何年何月除隊

財團法人農民講道館長

第三號表　履　歴　書

右之通相違無之候也

年　月　日

右　氏　名㊞

第四號表　市町村長推薦書

本　籍

現住所

氏　名

右ノ者財團法人農民講道館ニ入館志望ノ處適任者ト認メ推薦候也

年　月　日

何府縣何郡（市）何町村長

何　某㊞

財團法人農民講道館長

殿

第五號表　卒　業　證　書

館印

族　籍

氏　名

生年月日

右ノ者本館ノ課程ヲ卒業セシコトヲ證ス

年　月　日

財團法人農民講道館長　氏　名㊞

契

三、農民講道館の内容

第何號

第六號表　保　證　書

本　籍
現住所　　氏　　生年月日　　名

右ノ者入館御許可相成候ニ付テハ館則ヲ遵守セシムルハ勿論本人ノ身上ニ關シテハ保證人ニ於テ其ノ責ニ任スヘク證書提出候也

年　月　日　本　籍
現住所

族稱職業
保證人　氏　　名

殿

財團法人農民講道館長

第七號表　身體檢査書

現住所　　氏　　生年月日　　名

一、體　格　　一、身　長　　一、體　重
一、胸　圍　　一、中心視力（色盲、眼疾）
一、聽　力（耳疾）　一、呼吸器
一、神經系　　一、皮　膚　　一、言　語
一、既往現在ノ疾病又ハ畸形

右檢査ノ結果相違無之候也

年　月　日　檢　査　現住所
醫師　氏　　名　㊞

財團法人

農民講道館寄附行爲

第一章　目　的

第一條　本財團ハ農村子弟ノ心身ヲ鍛錬シテ健全ナル農民精神ヲ涵養スルト共ニ農業經營方法ヲ革新シ農村ノ更生振興ヲ圖リ併セテ堅實ナル海外植民ヲ養成スルヲ以テ目的トス

第二條　本財團ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

一　農民講道館ノ經營

三、農民講道館の內容

二　本財團ノ目的ヲ達成スル爲ニ必要ナル事業又ハ出版ヲ爲スコト

第二章　名稱及事務所

第三條　本財團ハ財團法人農民講道館ト稱ス

第四條　本財團ハ事務所ヲ埼玉縣北足立郡與野町大字圓阿彌字山王東二百七十二番地ニ置ク

第三章　資産及會計

第五條　本財團ノ資産ハ設立者ノ寄附ニ係ル別紙財産目錄記載ノ財産並ニ本法人設立後ノ寄附金及其他ノ收入ヨリ成ル

第六條　前條ノ資産中現金壹萬圓及設立後基本財産トシテ指定寄附セラレタル金品ヲ以テ基本財産トス

經費ノ剩餘金ハ理事會ノ決議ヲ以テ之ヲ基本財産ニ編入ス但シ其全部又ハ一部ヲ次年度ニ繰越スコトヲ妨ケス

基本財産ハ之ヲ消費スルコトヲ得ス但シ天災事變其他已ムヲ得サルトキハ理事會並ニ評議員會ノ決議ヲ經テ主務官廳ノ承認ヲ得テ一時之ヲ流用スルコトヲ得

第七條　本財團ノ基本金ハ國債證券ヲ買入レ又ハ確實ナル信託會社又ハ銀行若クハ郵便局ニ預入スルモノトス

第八條　本財團ノ資産ハ理事會ノ議ニ基キ館長之ヲ管理ス

第九條　本財團ノ經費ハ左ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨ス

一　農民講道館ノ實習收入

二　授業料

三　基本金ノ利子

四　寄附金

五　雜收入

第十條　經費ノ收入豫算ハ毎年度開始一ケ月前評議員會ノ決議ヲ經テ之ヲ定メ決算ハ年度經過後評議員會ノ認定ヲ經ルコトヲ要ス

第十一條　本財團ノ事業年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ルモノトス

第四章　役員

第十二條　本財團ニ左ノ役員ヲ置ク

館長　一名

理事　八名

監事　五名

三、農民講道館の内容

評議員　若干名

第十三條　館長ハ設立當初ニ於テハ設立代表者之ニ當ル
館長辭任死亡又ハ其職務ヲ執行スルコト能ハサルニ至リタル場合ニ於テハ評議員會ノ推薦ヲ以テ理事中ヨリ選任ス
館長ハ理事タルモノトス

第十四條　理事及監事ハ評議員會ヲ經テ館長之ヲ依囑ス但シ本財團設立ノ際ハ設立代表者之ヲ依囑ス
理事及監事ノ任期ハ三年トス　但シ再選ヲ妨ケス

第十五條　評議員ハ本財團設立ノ際設立代表者之ヲ依囑ス
評議員ヲ補充セントスルトキハ理事會ノ推薦ニ依リ館長之ヲ依囑ス
評議員ノ任期ハ終身トス

第十六條　補缺ニ依リ就任シタル役員ノ任期ハ前任役員ノ殘餘期間トス
役員ハ其任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄仍ホ職務ヲ行フ義務アルモノトス辭任ノ場合亦同シ

第十七條　館長ハ本財團ノ事務ヲ統轄シ且本財團ヲ代表ス
館長事故アル場合ハ理事ノ互選ニヨリ其代理者ヲ定ム

館長ハ理事會及評議員會ノ議長トナル
理事ハ本財團ノ事務ヲ執掌ス
監事ハ民法第五十九條ノ職務ヲ行フ

第十八條　評議員會ハ評議員會ヲ組織シ本寄附行爲各條所定ノ事項ヲ決議スル外理事會ノ諮問ニ應ス
理事及監事カ老衰、疾病其他ノ理由ニヨリ其職務ヲ行フニ不適當ト認メラレタルトキハ評議員會ノ決議ニヨリ之ヲ解任スルコトヲ得

第十九條　本財團ニ顧問及贊助員ヲ置クコトヲ得
顧問及贊助員ハ理事會ノ推薦ニヨリ館長之ヲ依囑ス

第二十條　本財團ハ必要ニ應シ職員及囑託ヲ置ク
前項ノ職員及囑託ハ豫算ノ範圍内ニ於テ館長之ヲ任用又ハ囑託ス
職員及囑託ハ館長ノ指揮ヲ受ケ館務ヲ掌ル

第五章　會議

第廿一條　會議ヲ分チテ理事會並ニ評議員會ノ二種トス

第廿二條　理事會ハ館長必要ト認メタルトキ又ハ理事過半數以上ノ請求アルトキハ館長之ヲ招集スルコトヲ要ス

理事會ハ理事二分ノ一以上ノ出席ヲ以テ成立シ議事ハ出席員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

理事會ニ於テ書面又ハ他ノ理事ニ委任シテ表決ヲナスコトヲ得

前項ノ表決ハ之ヲ出席者ト見做ス

第廿三條　前條ノ規定ハ評議員會ニ之ヲ準用ス

第六章　寄附行爲ノ變更並ニ解散

第廿四條　本寄附行爲ハ理事會及評議員會ノ決議ヲ經タル上主務官廳ノ認可ヲ得テ之ヲ變更スルコトヲ得但シ理事會及評議員會ノ決議ハ出席者三分ノ二以上ノ同意アルコトヲ要ス

第廿五條　本財團ハ理事會及評議員會ノ決議ヲ經タル上主務官廳ノ認可ヲ得テ之ヲ解散スルコトヲ得但シ理事會及評議員會ノ決議ハ出席者四分ノ三以上ノ同意アルコトヲ要ス本財團解散ノ場合ニ於ケル殘餘財産ノ處分ハ前項ノ規定ヲ準用ス

第七章　雜則

第廿六條　本寄附行爲ニ必要ナル細則ハ理事會ニ於テ之ヲ定ム

第廿七條　本財團設立當時ニ於ケル理事監事ヲ定ムルコト左ノ如シ

東京市澁谷區鶯谷町二十五番地　理事　横尾惣三郎

東京市芝區二本榎町二丁目二十三番地　理事　馬場鍈一

東京市品川區北品川六ノ三八七　理事　金子喜代太

東京市淀橋區戸塚町三丁目三十六　理事　膳桂之助

東京市赤坂區青山南町五丁目百三十五　理事　月田藤三郎

東京市豐島區雜司ケ谷町一丁目六十三　理事　千石興太郎

埼玉縣大里郡奈良村大字中奈良二千五十五　理事　石坂養平

埼玉縣北埼玉郡三田ヶ谷村大字喜右衛門新田三五六
理事　齋藤重雄
東京市大森區田園調布三丁目百二十六
監事　矢野恒太
神奈川縣中郡大磯町西小磯七百八十
監事　諸井貫一
東京市小石川區駕籠町百五十四
監事　渡邊得男
埼玉縣北足立郡三橋村大字側ヶ谷戸參百五十六
監事　武笠庄太郎
埼玉縣北足立郡與野町大字與野千三百二十七
監事　井原貞亮

農民講道館昭和九年度豫算

收入之部

一、農場收入		五七四七、〇〇円	實習地八町歩反當六十圓
	夏作	二一八七、〇〇	
	秋作	一二一〇、〇〇	
	冬作	七一〇、〇〇	
	水田	七二〇、〇〇	
	溫室	七二〇、〇〇	溫室百二十坪五月以降
	電化農場收入	二〇〇、〇〇	芙蓉利用組合賃貸料
二、畜産收入			
	雞卵	三六五〇、〇〇円	成雞千九百羽六ヶ月分

雞肉	一〇〇、〇〇円	肉豚百五十頭分
豚肉	三〇〇〇、〇〇	山羊十頭十ヶ月分
山羊乳	六〇〇、〇〇	一頭分
肥育牛	一八〇、〇〇	四十五名月謝一圓
三、授業料	五四〇、〇〇	四十五名一月五十錢
四、塾舍費	二七〇、〇〇	
五、雜收入	二〇〇、〇〇	
六、補給費	一九一三、〇〇	
計	一六二〇〇、〇〇	

支出之部

一、諸給	四九一〇、〇〇円	
俸給	四二六〇、〇〇	月額三百五十圓外一ヶ月分六十圓
賞與	四五〇、〇〇円	
旅費	二〇〇、〇〇	
二、事務所費	三六〇、〇〇	
通信費	一六〇、〇〇	
印刷費	五〇、〇〇	
消耗品費	一五〇、〇〇	
三、塾舍費	二七〇、〇〇	電燈料及修繕費
四、農場費	四〇五〇、〇〇	
小作料	一二〇〇、〇〇	一年分五町八反半年分四町二反
肥料費	一〇〇〇、〇〇	八町歩夏作秋作冬作
種苗費	九五〇、〇〇	
藥劑費	四〇〇、〇〇	

補熱費	五〇〇〇〇円	
五、家畜費		
養豚	一八〇〇〇〇	種豚三十頭、肉豚百五十頭
養雞	二三五〇〇〇	成雞千九百羽六ヶ月分
山羊	三〇〇〇〇	十頭十二ヶ月分
役牛	一六〇〇〇	二頭分
消耗品費	一五〇〇〇	藁代等
六、動力費	一二〇〇〇	
七、雜費	二〇〇〇〇	
八、豫備費	一五〇〇〇	
計	一六二〇〇〇	

備考　昭和九年度の豫算は創立初年度のものであるから、果樹の收入は勿論農場畜産共に餘程少いので、昭和十一年度から本格的收入となるのである。創立三箇年間に補給費約五千圓の豫定で初年度は補給費二千五百圓の豫定であつたが豫定以上に順調に進んだので、千九百十三圓とした。完全の自給自足は現在の進行狀況では昭和十一年度からである。先づ三箇年間創業時代として損失補給金を見るのが穩當である。

昭和九年四月五日印刷
昭和九年五月八日發行
昭和九年五月十日第二版發行
昭和九年五月二十日第三版發行
昭和九年六月七日第四版發行

定價金參拾五錢
郵稅貳錢

版權所有

著作者　埼玉縣與野町農民講道館　横尾惣三郎
東京市澁谷區代々木町上原一〇九八　岩塚源也

發行者　東京市神田區神保町一ノ三四　高田壬午郎
印刷者　東京市神田區保神町一ノ三四　株式會社開明堂東京營業所
印刷所　埼玉縣與野町農民講道館內　農村教育革新協會
發行所　振替東京四七七七六

291.3
27

終